

# 中国共産党の歴史 についての決議

( 1949～1981 )

毛沢東、「文化大革命」  
および人民共和国の成果  
についての権威ある評価

# 中国共産党の歴史 についての決議

(1949~1981)

外文出版社  
北京

## 目次

建国いろいろの党の若干の歴史的問題についての決議……………	1
（一九八一年六月二十七日、中国共産党第十一期中央委員会第六回総会で一致採択）	
中国共産党創立六十周年祝賀集会での演説……………	胡耀邦…………… 87
（一九八一年七月一日）	
中国共産党第十一期中央委員会第六回総会の公報……………	123
（一九八一年六月二十九日採択）	

建国いろいろの党の若干の  
歴史的問題についての決議

(一九八一年六月二十七日、中国共産党  
第十一期中央委員会第六回総会で一致採択)

## 建国前二十八年の歴史の回顧

(一) 一九二二年の創立 이래、中国共産党はすでに六十年にわたる輝かしい戦闘の過程を経た。建国以来三十二年の党の経歴を総括するには、建国以前の二十八年間、党が人民を指導しておしすすめた新民主主義革命の闘争の過程をさつとふりかえてみる必要がある。

(二) 中国共産党はマルクス・レーニン主義と中国の労働運動との結合の所産であり、ロシア十月革命とわが国の「五・四」運動の影響のもとに、レーニンの指導するコミンテルンの援助を得て生まれたものである。一九一一年、偉大な革命の先駆者孫中山先生の指導する辛亥革命によって清朝がくつがえされ、二千余年もつづいた封建帝制に終止符が打たれた。だが、中国社会の半殖民地・半封建的性格は変わったわけではない。当時の国民党にしても、その他のブルジョアジー、小ブルジョアジーの政治派閥にしても、国家と民族の活路を見出すことはできなかったし、またそれは不可能であった。中国の活路は帝国主義、封建主義の反動的支配を根底からくつがえし、さらに社会主義へと移行することにあることを人民に指示したのは、中国共産党だけである。創立当時、中国共産党はわずか五十余名の党員しかいなかった。党はすさまじい勢いの労働運動と広はんな人民大衆の反帝・反封建闘争をもちあげ、急速に発展して、中国人民のかけが

えない指導勢力となった。

(三) 中国共産党は、中国の各民族人民を指導して新民主主義のためにたたかう過程で、国共合作の北伐戦争、土地革命戦争、抗日戦争、全国解放戦争という四つの段階を経てきた。その間、一九二七年と一九三四年との二回にわたり重大な失敗をなめるといふ苦しい試練を経たものの、長期にわたる武装闘争と各分野のさまざまな形態の闘争とを緊密に結びつけることによつて、一九四九年、ついに革命の勝利をかちとつたのである。

一九二七年、蒋介石と汪精衛に牛耳られた国民党は、傑出した人物宋慶齡に代表される国民党左派の断固たる反対を無視して、孫中山の決定した国共合作と反帝・反封建の政策にそむき、帝国王主義と結託して、共産党員と革命的人民を虐殺した。当時、党はまだ比較的未熟で、陳独秀の右翼投降主義の指導のもとにあつたため、強大な敵が突然おそいかかってきたとき、革命は手痛い敗北を喫し、六万余の党員を擁していた党は一万余の党員をあますのみとなつたのである。

しかし、党は依然としてねばりつよく戦いつづけた。まず、周恩来同志らの指導する南昌蜂起によつて、国民党反動派にたいする武力抵抗の火ぶたが切つておとされた。党の「八・七会議」で土地革命と武装蜂起の方針が確定すると、やがて秋収蜂起、広州蜂起、その他の地域での蜂起が決行された。毛沢東同志の指導する湖南・江西省境地区での秋収蜂起では、労農革命軍第一師

団が編成され、井冈山に最初の農村革命根拠地がうち立てられた。朱徳同志の指導する蜂起部隊もまもなく井冈山に到着して合流した。その後、闘争の発展につれて、党は江西省の中央革命根拠地と湘鄂西(湖南・湖北省西部)、海豊・陸豊、鄂豫皖(湖北・河南・安徽省)、瓊崖(海南島)、閩浙贛(福建・浙江・江西省)、湘鄂贛(湖南・湖北・江西省)、湘贛(湖南・江西省)、左江・右江、川陝(四川・陝西省)、陝甘(陝西・甘肅省)、湘鄂川黔(湖南・湖北・四川・貴州省)などの根拠地をあいっいで樹立し、労農赤軍第一、第二、第四方面軍とその他多くの赤軍部隊を創設した。国民党支配下の白色地区でも、苦しい条件のもとで党とその他の革命組織が発展し、大衆的な革命闘争がくりひろげられた。土地革命戦争では、毛沢東、朱徳諸同志のみならず指導する赤軍第一方面軍と中央革命根拠地がもつとも重要な役割を果たした。赤軍の各方面軍は国民党軍の再三にわたる「包圍討伐」をつぎつぎと撃ち破つた。だが、王明の左翼冒險主義の指導によつて五回目の反「包圍討伐」戦争に敗北したため、第一方面軍はやむなく二万五千華里の長征を執行して陝西省北部に転戦し、そこで闘争を堅持していた陝西省北部の赤軍ならびにそれより先にそこに到着していた赤軍第二十五軍と合流した。第二、第四方面軍も前後して長征をおこない、陝西省北部に転戦した。赤軍の主力が撤去したあとの一部南方根拠地では、困難な条件のもとで遊撃戦争が堅持された。王明の左よりの誤りによる敗北のため、革命根拠地と白色地

区の革命勢力はきわめて大きな損害をこうむった。赤軍は三十万人から約三万人に減り、共産党員も三十万人から約四万人に減っている。

一九三五年一月、党中央政治局は長征の途上、貴州省の遵義で会議をひらき、赤軍と党中央における毛沢東同志の指導的地位を確立した。これによって、赤軍と党中央はきわめて危険な状態からぬけ出すとともに、そのご張国燾の分裂主義にもう勝ち、みごとに長征をなしとげて、中国革命の新たな局面を切りひらいたのである。これは、党の歴史上、その存亡にかかわる転換点であった。

日本帝国主義がわが国にたいする侵略に拍車をかけ、わが民族が重大な危機に立たされたこの決定的時点にさいし、毛沢東同志をはじめとする党中央は正しい抗日民族統一戦線政策を決定して、これを実行にうつした。党は「一二・九」学生運動を指導し、内戦停止・抗日救国の強大な大衆闘争をもちあげた。張学良、楊虎城両將軍が西安事変を起こし、わが党がその平和的解決をうながしたことは、国共の二度目の合作と団結抗日を促進する面で大きな歴史的役割を果たした。抗戦の時期において、国民党支配集団はひきつづき反共・反人民の消極的抗戦の姿勢をすてず、抗日の正面の戦場で敗退に敗退をかさねた。わが党は統一戦線における独立自主の政策を堅持し、広はん人民大衆にしっかりと依拠して、敵の後方における遊撃戦争を展開し、数多くの抗

日根拠地を樹立した。赤軍を改編した八路军と新四軍は、急速に発展して、抗戦の中堅勢力となった。東北抗日連合軍はひじょうに困難な状況のもとで戦いを堅持した。敵の占領地域と国民党支配区でも、さまざまな形の抗日闘争が幅広く展開された。こうして、中国人民の抗日戦争は八年間も堅持され、ソ連や他の国々の人民の反ファシスト戦争と呼応して最後の勝利をからとることができたのである。

抗日戦争の時期、わが党は一九四二年から全党で整風というマルクス主義の思想教育運動をすすめ、大きな成果をおさめた。この土台のうえに、一九四五年、党の六期七中総で『若干の歴史的問題についての決議』を採択し、つづいて開かれた党の第七回全国代表大会では、歴史的経験を総括するとともに、新民主主義の新中国をうちたてるため正しい路線、方針、政策を決定し、こうして全党は思想、政治、組織の面であつてみない統一と団結を表現した。抗日戦争の終結後、蒋介石政府はアメリカ帝国主義の援助にたよって、平和と民主を表現しようとするわが党と全国人民の正義の要求を拒否し、公然と全面的な内戦をひき起こした。全国各解放区人民の総力をあがけた支援と国民党支配区の学生運動、労働運動と各階層人民の闘争の力づよい呼応、さらに各民主党派、無党派民主人士の積極的な協力のもとに、党は人民解放軍を指導して三年余にわたる解放戦争をすすめ、遼瀋（遼寧・瀋陽）戦役、平津（北平・天津）戦役、淮海戦役の三大戦役と長

江渡河作戦を経て、蒋介石軍八百万をせん滅し、国民党反動政府をくつがえして、偉大な中華人民共和国をうちたてた。中国人民は立ちあがったのである。

(四) 二十八年にわたる闘争の勝利は、つぎのことをあますところなく示している。

一、中国革命の勝利は、マルクス・レーニン主義の指導のもとでかちとられたものである。わが党はマルクス・レーニン主義の基本的原理を創造的に運用し、それを中国革命の具体的実践と結びつけて、偉大な毛沢東思想をつくりあげ、中国革命の勝利をかちとる正しい道をさがしあてた。これはマルクス・レーニン主義の発展のための大きな貢献である。

二、中国共産党はプロレタリアートの前衛で、誠心誠意人民に奉仕し、いかなる私的な利益もはからぬ政党であり、大胆かつ巧みに人民を指導して敵とねばり強くなったかう政党である。中国各民族人民はみずからの体験を通してこの事実をみてとったため、党のまわりに幅広い統一戦線を結成し、わが国の歴史上かつてみない強固な政治的団結を実現することになった。

三、中国革命の勝利は、主として、わが党の指導するまったく新しい型の、人民と骨肉のつながりのある人民軍隊に依拠し、長期にわたる人民戦争で強大な敵を打ち負かすことによつてかちとられたものである。このような人民の軍隊がなければ、人民の解放と国家の独立はありえない。

四、中国革命はどの段階でも各国の革命勢力の援助を得た。中国人民はこのことを永遠に忘れることはない。しかし、中国革命の勝利は、つまるところ、中国共産党が独立自主、自力更生の原則を堅持し、中国各民族人民自身の力に依拠して、ありとあらゆる苦難にたえ、かずかずの困難と障害をのりこえてかちとったものである。

五、中国革命の勝利は、わが国では、ごく少数の搾取者が広はんな勤労人民を支配していた歴史に終止符を打ち、帝国主義、植民地主義が中国の各民族人民を奴隷化していた歴史に終止符を打った。勤労人民が新しい国、新しい社会の主人公となったのである。世界人口の四分の一近くを占める大國で人民革命が勝利したことは、世界の政治的な力関係を変えるときにも、中国のように帝国主義、植民地主義の搾取と抑圧をうけている多くの国の人民をばげまし、前途への確信を強めさせた。中国革命の勝利は第二次世界大戦以後のもっとも大きな政治的出来事であり、国際情勢と世界人民の闘争の発展にはかり知れない大きな影響をおよぼした。

(五) 新民主主義革命の勝利は、革命に命をささげた数知れぬ人びとと全党の同志、全国各民族人民の長期にわたる献身的な奮闘によつてかちとられたものである。われわれはこれらのすべてを革命の指導者たちの功績と見なすべきではないが、指導者たちの果たした重要な役割を過小評価すべきでもない。党の数多くのすぐれた指導者のなかでも、毛沢東同志は第一位に位置づ



けられる。一九二七年の革命が失敗する直前、毛沢東同志は農民闘争にたいするプロレタリアートの指導の緊要性と、この問題をめぐる右翼的偏向の危険性をはつきりと指摘していた。革命が失敗すると、かれは党の活動の重点を首尾よく都市から農村へ移し、農村に革命勢力を温存、回復、発展させるうえで主要な役割を果たした。一九二七年から一九四九年までの二十二年間、毛沢東同志は党のその他の指導者とともに、あらゆる困難を克服して、革命をみじめな失敗から偉大な勝利へと導いていく全般的な戦略と個々の政策を着々とつくりあげ、これを実行にうつすのを指導した。もしも毛沢東同志が再三、中国革命を危機のなから救い出さなかったならば、もしも毛沢東同志をはじめとする党中央が全党、全国各民族人民と人民の軍隊に確固とした正しい政治的方向をさし示さなかったならば、わが党と人民はさらに長期にわたって暗黒のなかを摸索しつづけなければならなかったであろう。中国共産党が一般に全国各民族人民の指導的中核と認められているのと同様、毛沢東同志は中国共産党と中国各民族人民の偉大な指導者と認められており、党と人民の集団的な闘いのなから生まれた毛沢東思想も党の指導思想と認められている。これは、中華人民共和国成立前の二十八年にわたる史的発展の必然的な結果である。

#### 建国後三十二年の歴史にたいする基本的評価

(六) 中華人民共和国が生まれて後の中国共産党の歴史は、総じていえば、わが党がマルクス・レーニン主義と毛沢東思想の指導のもとに、全国各民族人民を指導して社会主義革命と社会主義建設をすすめる、大きな成果をおさめてきた歴史であった。社会主義制度の確立は、わが国の歴史上もつとも深い意義をもつ、もつとも偉大な社会的変革であり、わが国のこれからのすべての進歩と発展の基礎である。

(七) 建国後三十二年間にわれわれのちとった主な成果は、つぎのとおりである。

一、労働者階級の指導する、労働同盟を基礎とした人民民主主義独裁、すなわちプロレタリアート独裁の国家権力を樹立し、うち固めたこと。これは中国の歴史上かつてみない、人民を主人公とする新しい型の権力であり、富強・民主・文明の、現代化した社会主義国を建設するうえでの根本的な保証である。

二、全国的範囲（台湾などの島をのぞく）で国家の統一を実現し、うち固め、旧中国の四分五裂の局面を一変させたこと。われわれは全国各民族人民の大団結を実現し、うち固め、五十余の民族の平等と相互援助の社会主義的民族関係をささげ、発展させた。われわれは全国の労働

者、農民、知識分子、その他各階層の人民との大団結を実現し、これをうち固め、中国共産党の指導する、愛国民主諸党派と人民団体の協力しあう、すべての社会主義的勤労者、社会主義を擁護する愛国者、祖国の統一を擁護する愛国者の参加する、台湾同胞、香港・澳門（マカオ）同胞と海外華僑を含めた幅広い統一戦線を強化し、拡大した。

三、帝国主義と覇権主義の侵略、破壊、武力挑発にうち勝ち、国家の安全と独立を守りぬき、祖国の国境を守る闘争を勝利のうちにすすめた。

四、社会主義経済を確立し、発展させ、生産手段私有制の社会主義的改造を基本的になしとげ、生産手段の共有制と労働に応じた分配を基本的に実現したこと。搾取制度は廃止され、階級としての搾取階級はもはや存在しなくなった。かれらのうちの圧倒的多数は、自分の労働で生活する勤労者となっている。

五、工業建設で大きな成果をおさめ、比較的とのつた独立した工業体系と国民経済体系を逐次つくりあげたこと。一九八〇年を経済面の回復の達成された一九五二年と比べてみると、工業部門の固定資産は五二年当時の価格に換算して二十七倍余の四千百余億元となっている。また、綿糸生産量は四・五倍の二百九十三万トン、石炭生産量は九・四倍の六億二千万トン、発電量は四十一倍の三千余億キロワット時、原油採出量は一億五百余万トン、粗鋼生産量は三千七百余万ト

ン、機械工業生産額は五十四倍の千二百七十余億元に達している。広大な内陸部と少数民族居住地区にも、新たな工業基地が一部建設された。国防工業は無から有へと逐次発展をとげた。資源の探査の面でも大きな成果をあげている。鉄道、自動車道路、船舶、航空などの輸送事業と郵便・通信事業も大きな発展をとげた。

六、農業生産の条件もいちじるしく改善され、生産水準が大幅に向上した。全国の灌漑面積は、一九五二年の三億ムー（一ムーは約六、六六七アールに相当）から現在の六億七千万ムーにまで拡大した。長江、黄河、淮河、海河、珠江、遼河、松花江など大きな河川の洪水も、普通の規模のものなら、一応防止できるようになった。解放前、わが国の農村には、農業機械、化学肥料、電気などがほとんどなかったが、いまでは農薬用トラクターと排水・灌漑機械をもつようになり、化学肥料の施肥量も大幅に増加し、電力使用量も解放直後の全国発電総容量の八・五倍に達している。一九八〇年には一九五二年と比べて、全国の穀物収穫高は二倍近くになり、綿花も二倍以上になった。人口の増加が速すぎ、現在すでに十億近くになっているにもかかわらず、われわれはやはり自己の力に依拠して、十億近い人民の衣食を基本的に確保している。

七、都市と農村の商業と対外貿易はいずれも大きく発展している。一九八〇年を一九五二年と比べてみると、全人民所有制商業の商品買付総額は百七十五億元から二千二百六十三億元に増え

て、十二・九倍となり、一般消費物資小売総額も二百七十七億元から二千四百十億元に増えて、七・七倍となっている。対外貿易総額も、八・七倍となった。工業、農業および商業の発展にともない、人民の生活も解放前にくらべて大幅に改善された。一九八〇年、全国の都市と農村の一人あたり平均消費水準は、物価的要因を控除しても一九五二年の二倍近くになっている。

八、教育、科学、文化、衛生、体育などの事業にも大きな発展がみられた。一九八〇年における全国のさまざまな全日制学校の在校生徒数は二億四百万に達し、一九五二年の三・七倍に増えた。三十二年らしい、大学、中等専門学校は九百万近くの専門的人材を育成した。核エネルギー、人工衛星、運搬ロケットなどの面での成功は、科学・技術水準が大きく向上していることを物語るものである。文学・芸術の面でも、人民に奉仕し、社会主義に奉仕するすぐれた作品がたくさん現われた。大衆的な体育事業もめざましい発展をとげ、少なからぬ種目ですばらしい成績をあげている。悪性伝染病は絶滅、または基本的に絶滅した。都市と農村における人民の健康の水準も大きく向上し、平均寿命もだいぶ伸びた。

九、新たな歴史的条件のもとで解放軍が成長、向上をとげ、かつて陸軍しかなかった状態から、海軍、空軍およびその他の技術的兵種をも含めた総合的な軍隊に発展した。野戦軍、地方

軍、民兵の三結合の武装勢力も強化され、軍隊の体質や技術的装備にも大きな向上と改善がみられる。社会主義革命と社会主義建設を守り、これに参加するうえで、人民解放軍は人民民主主義独裁の堅固な柱石としての役割を發揮した。

十、国際面でも、社会主義の独立自主の外交方針を終始変わることなく実行して、平和共存の五原則を提唱するとともにそれを堅持し、世界の百二十四ヵ国と外交関係を樹立し、より多くの国家および地域と経済、貿易、文化面の交流を發展させた。国連と国連安保理事会におけるわが国の議席は回復された。われわれはプロレタリア国際主義を堅持して各国人民との友情を深め、被抑圧民族の解放事業、新興独立諸国の建設事業、各国人民の正義の闘争に支持と援助をあたえ、帝国主義、覇権主義、植民地主義、人種差別主義に断固反対し、世界平和を守り、国際問題を処理するうえでますます重要な積極的役割を果たしている。これらすべては、わが国の社会主義建設に有利な国際的条件をつくりだし、国際情勢を世界人民に有利な方向へと發展させている。

(八) 新中国は成立後まだ日があさく、われわれがすでにからとった成果も初歩的なものにならぬ。わが党は社会主義事業を指導する面で経験が足りず、党の指導部の情勢分析と国情にたいする認識にも主観主義的な片寄りがあったため、「文化大革命」以前には階級闘争の拡大化と

経済建設面でのあせりと暴走の誤りがあったが、その後また、「文化大革命」のような全局的な、長期にわたる重大な誤りが発生した。このため、われわれは本来ならからとるべきであったより大きな成果をからとることができなかった。誤りを無視し、誤りをおおいかくすことは許されない。そのこと自体が誤りであり、より多くの、より大きな誤りをまねくこととなる。だが、三十二年らい、われわれがからとった成果はなんといっても主要なものであり、われわれのからとった成果を無視するか、これを否定するか、これを否定し、こうした成果をからとった成功の経験は無視するか、これを否定するのも、やはり重大な誤りである。われわれの成果と成功の経験は、党と人民がマルクス・レーニン主義を創造的に運用した結果であり、社会主義制度の優位性のあらわれであり、全党と全国各民族人民が前進しつづけるための基礎である。「真理を堅持し、誤りを是正する」——これはわが党がとるべき弁証法的唯物論の根本的立場である。これまで、われわれはこの立場をとることによって、われわれの事業を危機からぬけ出させ、勝利へと向かわせることができた。今後もしきつづきこの立場をとることによって、さらに大きな勝利をからとることであろう。

### 社会主義的改造を基本的になしとげた七年

(九) 一九四九年十月に中華人民共和国が生まれてから一九五六年までの期間、わが党は全国各民族人民を指導して、新民主主義から社会主義への転化を段取りを追って実現し、国民経済を急速に回復させるとともに、計画的な経済建設をくりひろげ、全国の圧倒的多数の地区で生産手段私有制の社会主義的改造を基本的になしとげた。この歴史的段階では、党がさだめた指導方針と基本政策は正しく、からとった勝利も輝かしいものであった。

(一〇) 建国後の最初の三年間、われわれは大陸における国民党反動派の残存武装勢力と匪賊を一掃し、チベットの平和的解放をおこない、各級の人民政府を各地にうち立て、官僚資本の企業を没収して、これを社会主義の国营企業に改造し、全国の財政・経済活動を統一し、物価を安定させ、新解放区の土地制度の改革をなしとげ、反革命分子を鎮圧し、汚職、浪費、官僚主義とたたかう「三反」運動を展開し、贈賄、脱税、国家資材の横領、手抜きと材料のごまかし、経済情報の窃取など、ブルジョアジーの進攻を撃退する「五反」運動を展開した。また、旧中国の教育・科学・文化事業を効果的に改造した。繁雑で重要な社会改革の任務をみことになしとげ、偉大な抗米援朝と祖国防衛の戦争を首尾よくおしすすめると同時に、われわれは旧中国でひどく

破壊されていた国民経済を急速に回復させ、一九五二年末には全国の工農生産を史上最高の水準にまで引きあげた。

(一一) 一九五二年、党中央は毛沢東同志の提議にもとづいて過渡期の総路線をうち出した。かなり長い期間内に国の社会主義的工業化を逐次実現するとともに、農業、手工業、資本主義工商業にたいする社会主義的改造を逐次実現するというのがそれである。この総路線は、歴史の必然性を反映したものであった。

一、国の社会主義的工業化は、独立と富強をめざす国家の当然の要求であり、そのための必要不可欠な条件である。

二、新民主主義革命が全国で勝利し、土地制度の改革が全国でなしとげられたあと、国内の主要な矛盾は労働者階級とブルジョアジーとの間、社会主義の道と資本主義の道との間の矛盾に転化した。国家としては国の経済と人民の生活に役立つ資本主義工商業のある程度の発展を必要とするが、資本主義工商業が発展すれば国の経済と人民の生活に不利な側面もかならず現われてくる。そこで、制限と反制限との闘争が起こらざるを得ない。資本主義企業と国家の経済諸政策との間、これらの企業と社会主義的国营経済との間、これらの企業と各企業の労働者・職員や全国各民族人民との間で、利害衝突がますますはつきりしてきた。投機取引の取締り、工商業の調

整と改組、「五反」運動の推進、労働者による生産の監督、食糧・綿布の統一買付・統一販売など、一連の必要不可欠な措置と段取りがとられた結果、もともと立ち遅れ、混乱し、奇形な発展をとげていた、営利一点ばりの資本主義工商業は逐次、社会主義的改造の道に移らざるを得なくなった。

三、わが国の個人経営の農民、とくに土地改革で新たに土地を手に入れても、その他の生産手段をもたぬ貧農・下層中農のばあいは、高利貸からの借金や土地の貸付・売却によってふたたび両極分解の発生するのを避けるため、また、生産を発展させ、水利工事を実施し、自然災害とたたかい、農業機械その他の新技术をとり入れるため、かれらはたしかに互助・協同化の道を歩みながら進んでいった。工業化が進展すると、一面では農産物の需要がますます増え、他面では農業の技術的改造への支援が日まじしに強まってくる。このことも個人経営の農業の協同化への発展をうながす原動力となった。

歴史が立証しているように、党のうち出した過渡期の総路線はまったく正しいものであった。

(一二) 過渡期において、わが党は中国の特徴に適した社会主義的改造の道を創造的に切りひらいた。資本主義工商業にたいしては、委託加工、計画的発注、統一買付・一手販売、取次販売・代理販売、公私合営、全業種の公私合営といった、低い段階から高い段階にいたる国

家資本主義の一連の移行形態をつくり出して、かつてマルクスとレーニンが構想した、ブルジョアジーにたいする平和的な買戻しを最終的に実現した。個人経営の農業については、自由意志と相互利益、モデルケースの提示、政府の助成という原則にもとづいて、臨時互助組、常設互助組を半社会主義的性格の初級農業生産協同組合に発展させ、さらに社会主義的性格の高級農業生産協同組合へ発展させるという移行形態をつくり出した。個人経営の手工業にたいする改造でも、これと似た方法をとった。改造の過程で、国家資本主義経済と協同組合経済は顕著な優位性を示した。一九五六年になると、全国の大部分の地区で生産手段私有制にたいする社会主義的改造が基本的に達成された。だが、この仕事にも欠点と偏向はあった。一九五五年の夏、農協の協同化と手工業および個人経営商業の改造では、あまりに功をあせり、仕事は粗雑で、変革のテンポが速すぎ、移行形態も単純かつ画一的でありすぎたため、長期にわたって問題をいくつか残すことになった。一九五六年、資本主義工商業の改造が基本的になしとげられてのち、一部のもと工商業者の扱いや処理にも、妥当を欠く点があった。だが、総じていえば、数億の人口を擁する大國で、これほど複雑かつ困難で、深刻な社会的変革を比較的順調になしとげ、工農業と国民経済全般の発展をうながしたことは、たしかに偉大な歴史的勝利である。

(一三) わが国の第一次五年計画の時期の経済建設は、われわれ自身の努力とソ連その他の友好諸国の支援によって、おなじく大きな成果をおさめた。国の工業化に不可欠ではあるが、それまでひじょうに軟弱であった基幹産業も、いくらか建設された。一九五三年から一九五六年にかけて、全国の工業総生産額は年平均一九・六パーセントの伸びを示し、農業総生産額も年平均四・八パーセントの伸びを示した。経済の発展は比較的是やく、経済的効果も比較的よく、重要経済部門相互の比例関係も、比較的バランスがとれていた。市場は繁榮し、物価は安定した。人民の生活にもいちじろしい改善がみられた。一九五六年四月、毛沢東同志のおこなった『十大関係について』の講話は、わが国の社会主義建設の経験を初歩的に総括し、わが国の国情に即した社会主義建設の道をさぐりあてるといふ課題を提起している。

(一四) 一九五四年九月、第一回全国人民代表大会がひらかれ、中華人民共和国憲法が制定された。一九五五年三月にひらかれた党の全国代表者会議では、党を分裂させ、党と国家の最高権力をのっとろうとした野心家高崗、饒漱石にたいする重大な闘争について総括がおこなわれ、党の団結が強化された。一九五六年一月に党中央の開催した知識分子の問題についての会議と、その後に出された「百花齊放、百家争鳴」の方針では、知識分子と教育・科学・文化活動についての正しい政策が定められ、これら諸事業の繁榮がうながされた。党の正しい政策、すぐれ

た作風、高い威信が人心に深く根をおろしたため、広はん幹部、大衆、青年、知識分子はマルクス・レーニン主義と毛沢東思想を自覚的に学び、党の指導のもとで革命と建設の諸活動に積極的に参加するようになった。革命的で、健全な、活気にみちあふれた社会の倫理と気風が全国に生みだされた。

(一五) 一九五六年九月、党の第八回全国代表大会が大きな成功をおさめた。この大会で指摘されたのはつぎの諸点である。わが国では、社会主義制度がすでに基本的に確立している。われわれはまだ台湾の解放、社会主義的改造の徹底的達成、搾取制度の最終的廃絶と反革命残存勢力のひきつづく肅清のためにたたかわなければならぬが、しかし、国内の主要な矛盾はもはや労働者階級とブルジョアジーとのあいだの矛盾ではなく、経済、文化の急速な発展にたいする人民の要求と、当面の経済、文化が人民のこの要求を満たしていない現状とのあいだの矛盾に変わっている。全国人民の主要な任務は、全力をあげて社会的生産力を発展させ、国の工業化を実現し、日ましに増大する人民の物質的・文化的欲望を逐次満たしていくことにある。まだ階級闘争が存在するので、人民民主主義独裁を強めなくてはならないが、その根本的な目的はもはや新たな生産関係のもとで生産力を保護し、発展させることに変わっている——以上が大会で指摘された論点である。大会は、一九五六年五月に党中央の提起した、保守にも反対するし暴走にも反

対するという経済建設の方針、つまり総合的な均衡のなかで着実に前進するという方針を堅持した。大会はまた、政権の座にある党の建設強化の問題をとくに提起し、民主集中制と集団指導制の堅持、個人崇拜反対、党内民主と人民民主の発揚、党と大衆との結びつきの強化などを強調した。第八回大会の路線は正しいものであった。それは、新たな時期における社会主義事業の発展と党の建設のために方向をさし示したのである。

### 全面的な社会主義建設にとりかかった十年

(一六) 社会主義的改造を基本的になしとげてのち、わが党は全国各民族人民を指導して全面的な大規模の社会主義建設にとりかかった。「文化大革命」の前夜にいたる十年間、われわれは重大な挫折もなめたが、やはり非常に大きな成果をおさめた。一九六六年を一九五六年と比べてみると、全国の工業部門の固定資産は、もとの価格による計算で四倍に増えている。綿糸、石炭、発電量、原油、粗鋼および機械設備など主要工業品の生産量も大幅に伸びた。一九六五年以降、石油の完全自給体制がととのった。電子工業、石油化学工業など一連の新興産業がつつきと建設され、工業の配置も改善された。農業の基盤整備と技術的改造にも大々的に手をつけ、逐次成果をあげていった。全国の農業用トラクター保有台数と化学肥料使用量はいずれも七倍以

上に伸び、農村における電力使用量も七十一倍に伸びた。この十年間の大学卒業生総数もそれ以前の七年間の五・九倍となり、整頓を経た結果、教育の質もいちじるしく向上した。科学・技術の面でもかなりきわだった成果をおさめた。

この十年間、党は社会主義建設を指導する面で重要な経験を積んだ。一九五七年の春、毛沢東同志は社会主義社会における性質の異なった二つの社会的矛盾を正しく区別し処理すること、人民内部の矛盾の正しい処理を国内政治の主要課題とすることの必要性を提起した。そこで、毛沢東同志はまた、「集中もあれば民主もあり、規律もあれば自由もあり、意志の統一もあれば個人の気持ちのびのびし、生きいきとして活発でもある、という政治的局面」をつくりだすことを呼びかけた。一九五八年、毛沢東同志はまた、党と国家の活動の重点を技術革命と社会主義建設の面へ移すことを提起した。これらすべては第八回党大会の路線の継続、発展であり、その長期にわたって指導的意義をもつはずのものであった。毛沢東同志が「大躍進」と人民公社化運動の誤りの是正を指導したさいに提起した観点、つまり農民を収奪してはならない、段階を飛びこえてはならない、均等主義に反対する、商品生産の発展、価値法則の遵守、総合均衡の実現を強調する、農業、軽工業、重工業の順序による国民経済計画の策定を主張するなどの観点、また劉少奇同志が提起した観点、つまり多くの生産手段は商品として流通させてもよい、社会主義社

会には二種類の労働制度、二種類の教育制度（訳注）がなくてはならないなどの観点、さらに周恩来同志が提起した、わが国の知識分子の圧倒的多数はすでに勤労人民の知識分子となっており、科学技術がわが国の現代化建設でカギの役割を果たしているという観点、陳雲同志が提起した観点、つまり計画目標は実際に即したものでなければならず、建設の規模も国力に見合ったものでなければならぬ、人民の生活と国家の建設との双方に配慮しなければならない、計画を作成する際には物資、財政、金融のバランスがとれるようにしなければならないなどの観点、鄧小平同志が提起した、工業企業の整頓、企業管理の改善と強化、労働者・職員代表大会制度の実施などについての観点、朱徳同志が提起した、手工業と農業の多角経営の発展に意をそそがなければならないという観点、鄧子恢同志が提起した、農業においては生産責任制を実施する必要があるという観点——これらはすべて、当時もそれ以後も重要な意義をもつものであった。党中央が国民経済の調整過程でつぎつぎと制定した農村人民公社活動条例草案と、工業、商業、教育、科学、文学・芸術など各分野の活動条例草案は、社会主義建設の経験をかなり体系的に総括したあと、当

訳注

二種類の労働制度とは、工場、農村、政府機関における八時間労働の労働制度と、工場と農村における半工半学、半農半学の労働制度をさす。二種類の教育制度とは、全日制の学校教育制度と半工半学、半農半学の学校教育制度をさす。



時の状況に適した各分野の具体的政策をそれぞれ制定したもので、今日もなおわれわれにとって重要な参考価値がある。

要するに、われわれがいま現代化建設で依拠している物質的、技術的基盤は、かなりの部分がこの時期にきずかれたものである。全国の経済建設、文化建設など各分野の中堅となっている人材とその活動の経験も、大部分はこの時期につちかわれ、つみあげられた。これはこの時期における党の活動のおもな側面である。

(一七) この十年間、党の活動は指導方針の面に重大な失策があり、まがりくねった発展過程をたどった。

一九五七年は、経済活動の面で第八回党大会の正しい方針を真剣につらぬいたため、建国後最良の成果をあげた年である。この年、全党で整風運動を起し、党に対する批判や提案を大衆に出させたことは社会主義の民主を発揚するための正常な措置であった。だが、この整風の過程で、ごく少数のブルジョア右派分子がこの機に乗じて「大鳴、大放」なるものを鼓吹し、党と新生の社会主義制度をほいままに攻撃し、共産党の指導に取ってかわろうとしたため、こうした攻撃に断固反撃を加えたこともまったく正しかったし、必要なことであった。だが、反右派闘争はひどく拡大され、多数の知識分子、愛国人士や党内の幹部をまちがって「右派分子」ときめ

つけ、悲しむべき結果をもたらすことになった。

一九五八年、党の第八回大会第二回会議で採択された社会主義建設の総路線およびその基本点  
は、わが国の経済、文化の立ち遅れた状況を一変させようとする広範な人民大衆の切実な願い  
を反映している面では正しかった。だが、それは客観的な経済法則を無視するという欠点もあっ  
た。この会議の前後、生産建設のなかで、全党の同志と全国各民族人民は高度の社会主義的積極  
性と創意性を発揮し、一定の成果をあげた。しかしながら、社会主義建設にたいする経験の不足  
や、経済発展の法則性と中国経済の基本状況にたいする認識不足があったほか、また、なにをおい  
でも毛沢東同志をはじめ、中央と地方の少なからぬ指導者が勝利にのぼせて、おごりたかぶり、  
功をあげたため、主体的意志と主体的努力の役割を誇張し、着実な調査・研究とモデルケース  
によるテストをやらす、総路線がうち出されてから軽率に「大躍進」運動と農村の人民公社化運  
動をもちあげた。このため、高すぎる指標、デタラメな指揮、大ボラふきの風、「共産化の風」  
をおもな特徴とする左よりの誤りが大いにはん濫した。一九五八年の末から一九五九年七月の党  
中央政治局廬山会議の前期にいたる期間、毛沢東同志と党中央は全党を指導して、すでに気づい  
ていた誤りの是正につとめた。だが、廬山会議の後期になると、毛沢東同志は彭徳懐同志にたい  
する批判を起し、さらには全党で「右翼的偏向反対」の闘争をくりひろげるといふ誤りを犯し

た。「彭德懷、黃克誠、張聞天、周小舟らの反党集団」にかんする決議は、完全に誤ったものであった。この闘争のため、政治面では中央から末端にいたる党内民主がひどく損なわれ、経済面では左よりの誤りを是正する過程が中断され、誤りがいつそう長びくことになった。主としては「大躍進」と「右翼的偏向反対」の誤りのため、さらに当時の自然災害やソ連政府の背信的な契約破棄も加わって、わが国の国民経済は一九五九年から一九六一年までひどい困難に見舞われ、国家と人民は大きな損害をこうむった。

一九六〇年の冬、党中央と毛沢東同志は農村工作における左よりの誤りの是正に取りかかるとともに、国民経済にたいして、「調整、強化、充実、向上」の方針をとることに決め、劉少奇、周恩来、陳雲および鄧小平らの諸同志の主宰のもとで、ただちに一連の正しい政策と断固たる措置を決定、実施した。これはこの歴史的段階における重要な転換であった。一九六二年一月、七千人の参加する拡大中央工作会议では、「大躍進」における経験と教訓を一応総括し、批判と自己批判をくりひろげた。また、会議の前後に、「右翼的偏向反対」運動でまらがって批判された大多数の同志を再審査し、その名誉を回復した。そのほか、かつて「右派分子」ときめつけられた大多数のものから、そのレッテルはずしてやった。経済、政治の面でこうした措置がとられたため、一九六二年から一九六六年まで、国民経済は比較的順調に回復し、発展した。

だが、左よりの誤りは、経済活動の指導思想の面では徹底的に是正されるにいたらず、政治、思想、文化の面ではむしろ深刻さを増した。一九六二年九月の八期中総の席上、毛沢東同志は社会主義社会の一定範囲に存在する階級闘争を拡大化し、絶対化し、かれが一九五七年の反右派闘争後に提起した、プロレタリアートとブルジョアジーの矛盾は依然としてわが国社会の主要な矛盾であるという観点をさらに発展させ、社会主義の全歴史的段階にはブルジョアジーが存在し、復活をくわだて、党内に修正主義の発生する根源となるであろう、とまで断言するにいたった。一九六三年から一九六五年まで一部の農村と少数の都市の基層ですすめられた社会主義教育運動は、幹部の作風や经济管理などの問題を解決するにはたしかに一定の役割を果たした。だが、性質の異なるこれらの問題をすべて階級闘争、または階級闘争の党内における反映と見なしただため、一九六四年の後半には少なからぬ基層幹部に不当な打撃をあたえ、一九六五年のはじめにはまた運動の重点を「党内の資本主義の道をあゆむ実権派」への打撃に置くというこをうち出す誤りを犯した。イデオロギーの領域でも、一部の文学・芸術作品や学術観点、さらには文学・芸術界、学術界の一部代表者にたいして、まらがった、あるいは行きすぎた政治的批判をくわえ、知識分子の取扱いにたいする問題や教育、科学、文化の問題においても左の偏向がますますひどくなった。こうしたものが、のちに「文化大革命」の導火線となるわけである。ただし、当

時はこうした誤りもまだ全局に影響をおよぼすにはいたらなかった。

一九六〇年の冬らしい、全党と全国各民族人民のおもな注意力が経済調整の正しい方針の貫徹に向けられたため、社会主義建設にはふたたび活気あふれる繁栄の気運が次第にみなぎるようになった。党と人民は一致団結して、苦楽をともにし、国内ではみずからの直面している困難を克服し、国外ではソ連指導グループからの圧力をはねのけ、ソ連にたいする債務の全額（主として抗米援朝戦争のさいの軍需品買付の借款）を返済するとともに、多くの国の人民の革命闘争と建設事業を全力をあげて支援した。一九六四年の末から一九六五年のはじめにかけて開かれた第三期全国人民代表大会では、国民経済調整の任務は基本的に達成され、国民経済全体は新たな発展の時期に入ろうとしていると宣言し、わが国を現代的農業、現代的工業、現代的国防、現代的科学技術をもつ社会主義の強国に一步一步きざすきあげるため努力しようとの呼びかけがおこなわれた。だが、この呼びかけは「文化大革命」のために実現しなかったのである。

(二八)この十年間のすべての成果は、毛沢東同志をはじめとする党中央の集団指導のもつてかちとられたものである。この期間の活動における誤りも、その責任はやはり党中央の指導集団にある。毛沢東同志には主要な責任があるが、誤りのすべての責任を毛沢東同志ひとりに押しつけるわけにはいかない。この間、社会主義社会の階級闘争にかんする理論と実践の面で、毛沢

東同志の誤りはますますひどくなった。毛沢東同志の独断専行の作風は党の民主集中制を次第に損なうようになり、個人崇拜の現象が一步一步と発展していった。だが、党中央はこうした誤りをいちはやく是正することができなかった。林彪、江青、康生らの野心家は、悪らつにもこうした誤りを利用し、助長した。こうして、「文化大革命」が起こされることになったのである。

### 「文化大革命」の十年

(一九)一九六六年五月から一九七六年十月にいたる「文化大革命」によって、党と国家と人民は建国以来最大の挫折と損失をこうむった。この「文化大革命」は毛沢東同志が起こし、指導したもので、その主な論点はつぎのとおりである。党、政府、軍隊と文化領域の各分野には、ブルジョアジーの代表的人物と反革命の修正主義分子がすでに数多くもぐり込んでおり、かなり多くの部門の指導権はもはやマルクス主義者と人民大衆の手には握られていない。党内の資本主義の道をあゆむ実権派は、中央でブルジョアジーの司令部をつくり、修正主義の政治路線と組織路線をもち、各省・市・自治区および中央の各部門にそれぞれ代理人をかかえている。これまでの闘争はどれもこの問題を解決することができなかった。走資派の奪いとっている権力を奪いかえすには、文化大革命を実行して、公然と、全面的に、下から上へ広範な大衆を立ちあがら

せ、上述の暗黒面をあばき出すよりほかはない。これは、実質的には、一つの階級がもう一つの階級をくつがえす政治大革命であり、今後とも何回もおこなわなければならないものである——

こうした論点は、主として「文化大革命」の綱領的文献としての『五・一六通達』と党の第九回全国代表大会の政治報告のなかで明らかにされたもので、「プロレタリアート独裁下の継続革命の理論」というものに概括された。したがって、「プロレタリアート独裁下の継続革命」という言葉には特定の意味が含まれている。毛沢東同志の起こした「文化大革命」のこれらの左よりの誤った論点は、マルクス・レーニン主義の普遍的原理と中国革命の具体的実践とを結びつける毛

沢東思想の軌道から明らかに逸脱したもので、毛沢東思想とは完全に区別しなければならぬ。毛沢東同志が重用した林彪、江青らについていえば、かれらは最高権力の奪取をたくらむ二つの反革命集団をつくり、毛沢東同志の誤りにつけこみ、毛沢東同志にかくれて、国と人民に災いをもたらす大量の犯罪行為を働いた。これはまったく別の性格の問題である。かれらの反革命的罪業はすでにあますところなく暴露されているので、この決議では多くはふれないこととする。

(二〇) 「文化大革命」の歴史は、毛沢東同志の起こした「文化大革命」の主な論点がマルクス・レーニン主義に合致しないばかりでなく、中国の実情にも合致しないことを物語っている。これらの論点は、当時のわが国の階級的情勢および党と国家の政治的状况について、まった

く誤った判断をくだしている。

一、「文化大革命」は修正主義路線もしくは資本主義の道との闘争と言われているが、こうした論法にはまったく根拠となる事実がないばかりか、一連の重要な理論問題と政策問題にも是非の混同がみられる。「文化大革命」のなかで修正主義もしくは資本主義として批判されたものは、その実、マルクス主義の原理と社会主義の原則にはかならない。そのなかには、かつて毛沢東同志がみずから提起したもので支持したものもたくさんあった。「文化大革命」が建国いらい十七年にわたる数多くの正しい方針、政策、成果を否定したこと、これは実際には毛沢東同志自身をふくむ党中央と人民政府の活動を大きく否定し、これまで社会主義を建設してきた全国各民族人民の苦難にみちた闘いを大きく否定するものであった。

二、このような是非の混同が敵味方の混同をまねくのは必至である。「文化大革命」で打倒された「走資派」は、党と国家の各級組織における指導的幹部、つまり社会主義事業の中核的な力であった。党内には、劉少奇、鄧小平をはじめとする「ブルジョアジーの司令部」などというものはまったく存在しなかった。劉少奇同志におしつけられた「裏切り者」、「敵のまわし者」、「労働貴族」という罪名が、完全に林彪、江青らのデッチあげであったことは、確固たる事実によって立証されている。劉少奇同志にたいする八期十二中総の政治的結論と組織的処分はまった

く誤ったものである。「文化大革命」が「反動學術權威」なるものを批判したため、才能あり、功績ある多くの知識分子が打撃と迫害をうけ、敵味方の区別も極度に混乱させられた。

三、「文化大革命」は、直接大衆に依拠することを名としていたが、実際には党の組織からも、広範な大衆からも浮きあがっていた。運動がはじまると、党の各級組織はほとんど攻撃の矢面に立たされ、マヒ状態、半ばマヒ状態に陥った。党の各級の指導的幹部は普遍的に批判され、つるしあげられた、広範な党員は組織生活を停止され、党が長期にわたって依拠していた多くの積極分子や基本的大衆も排斥された。「文化大革命」の当初、大多数の者は毛沢東同志と党にたいする信頼から運動にまき込まれたのであり、ごく少数の過激分子をのぞけば、党の各級組織の指導的幹部を残酷なまでにつるし上げることにはだれも賛成していなかった。やがて、かれらはさまざまの曲がりくねった道をたどって自覚を高め、「文化大革命」にたいして次第に懐疑的傍観的な態度、さらには抵抗ないし反対の態度をとるようになった。なかには、このためにさまざまな打撃をうけた者も少なくない。このため、一部の投機分子、野心家、陰謀家につけこむスキをあたえることは、避けられなかった。かれらのうちの少なからぬ者は重要なポスト、もしくは非常に重要なポストに抜てきされた。

四、実践が物語っているように、「文化大革命」はいかなる意味でも革命とか社会的進歩ではなく、また、そうしたものではありません。「文化大革命」は、根本的にいって、「敵を混乱させた」のではなく、味方を混乱させたのである。だから、それは終始を通じて、「天下大いに乱れて、天下大いに治まるにいたる」というようなものではなく、また、そうしたものではありません。わが国においては、人民民主主義独裁の国家権力がうち立てられてのち、とくに社会主義的改造が基本的になしとげられ、階級としての搾取階級が消滅されてのち、社会主義革命の任務はまだ最終的には達成されなかったものの、革命の内容と方法はもはやこれまでとは根本的に異なるものになっていた。党と国家の機構のなかに確かに存在している一部の暗い面については、もちろん、当を得た評価をおこない、憲法、法律、党規約に合致した正しい措置によって解決する必要があるが、「文化大革命」のような理論と方法をとることは絶対に許されない。社会主義の条件のもとでは、「一つの階級がもう一つの階級をくつがえす政治大革命」などというものをおしすすめる、経済的基礎も、政治的基礎も存在しない。「文化大革命」がいかなる建設的綱領もうち出せず、重大な混乱、破壊、後退をもたらすだけであったのは当然である。歴史がすでに明らかにしているように、「文化大革命」は、指導者がまちがってひき起こし、それが反革命集団に利用されて、党と国家と各民族人民に大きな災難をもたらした内乱である。

(二) 「文化大革命」の過程はつぎの三つの段階に分けられる。

一、「文化大革命」の起こされたときから一九六九年四月の中国共産党第九回全国代表大会にいたるまで。一九六六年五月の中央政治局拡大会議と同年八月の八期十一中総の開催が、「文化大革命」の全面的に起こされた目じるしである。この二つの会議は、『五・一六通達』と『プロレタリア文化大革命についての決定』をあいっいで採択し、「彭真・羅瑞卿・陸定一・楊尚昆反党集団」なるものと「劉少奇・鄧小平司令部」なるものについて誤った闘争をすすめ、党中央指導機構の誤った改組をおこない、「中央文革小組」なるものを設けて、これに中央の権力の大部分をゆだねた。毛沢東同志の左よりの誤った個人的指導が実質的に党中央の集団指導に取ってかわり、毛沢東同志にたいする個人崇拜が熱狂的に鼓吹された。林彪、江青、康生、張春橋といった連中が主として「中央文革小組」の名のもとに、機に乗じて「すべてを打倒し、全面的な内戦をくりひろげる」ようあおり立てた。一九六七年二月初後、譚震林、陳毅、葉劍英、李富春、李先念、徐向前、聶榮臻ら政治局と中央軍事委員会の指導的同志がさまざまな会議で「文化大革命」の誤ったやり方をきびしく批判したが、逆に「五月逆流」ときめつけられて、屈服され、打撃をうけた。朱徳、陳雲両同志も誤った批判をうけた。各部門、各地方の党と政府の指導機構はほとんどが奪権されるか、改組された。人民解放軍を派遣して三支兩軍（左派の広範な大衆への支持・工業支援、農業支援、軍事管制、軍事訓練）をやらせたこと——これは当時の混乱した状況からみれば必要なことであり、局面を安定させるうえで積極的な役割を果たしたが、またいくらかの消極的な結果ももたらした。第九回党大会は「文化大革命」の誤った理論と実践を合法化し、党中央における林彪、江青、康生らの地位を強めることになった。第九回党大会の思想的、政治的、組織的指導方針はいずれも誤ったものである。

二、第九回党大会から一九七三年八月の第十回党大会にいたるまで。一九七〇年から一九七一年にかけて、林彪反革命集団が最高権力を奪取し、反革命武力クーデターをたくらむという陰謀事件が起きた。これは「文化大革命」が党の一連の基本原則をくつがえした結果であり、客観的には「文化大革命」の理論と実践の破たんを宣告するものである。毛沢東、周恩来同志はこのクーデターをたくみに粉碎した。周恩来同志は毛沢東同志の支持のもとに中央の日常活動を主宰し、各分野の活動に転機をもたらした。一九七二年、林彪を批判するなかで、周恩来同志は極左思潮を批判するという正しい意見を提起した。これは、一九六七年二月初後、中央の多くの指導的同志が「文化大革命」の誤りを是正するよう要求したその正しい主張の継続である。だが、毛沢東同志は、当時の任務を依然として「極右」に反対することだと考える誤りを犯した。第十回党大会は第九回党大会の左よりの誤りをうけつぎ、王洪文を党中央副主席のポストにつけた。また、江青、張春橋、姚文元、王洪文が中央政治局で「四人組」を結成し、江青反革命団の勢力命集

をいっそう強めることになった。

三、第十回党大会から一九七六年十月にいたるまで。一九七四年のはじめ、江青、王洪文らは「批林批孔」運動なるものを起こすよう提案した。これは一部の地方や部門で林彪反革命集団の陰謀活動と関係ある人物や事実を審査、整理したのとは異なり、江青らのホコ先は周恩来同志に向けられていた。毛沢東同志は最初、「批林批孔」運動の展開を承認したが、江青らがその機会に権力奪取の策動をすすめていることに気づくと、かれらをきびしく批判し、かれらは「四人組」であり、江青は党中央の主席になって「組閣」に手をつけようとする野心を持っていると指摘した。一九七五年、周恩来同志が重病に倒れると、鄧小平同志が毛沢東同志の支持のもとに中央の日常活動を主宰することになった。鄧小平同志は軍事委員会拡大会議や工業、農業、交通、科学技術などの問題を解決する一連の重要会議を開いて、多くの分野の活動を整頓したため、情勢があまりかに好転した。だが、毛沢東同志は、鄧小平同志が「文化大革命」の誤りを系統的に是正することを容認できず、またもや「鄧小平を批判し、右からの巻きかえしに反撃する」という運動を起こしたので、全国がふたたび混乱に陥った。一九七六年一月、周恩来同志が逝去した。周恩来同志は党と人民に限りなく忠誠で、ひたすら国のために尽くしたが、「文化大革命」では非常に困難な立場に置かれた。周恩来同志は大局を重んじ、苦勞をいとわず、人の非難にも

くじけることがなかった。かれは、党と国家の正常な活動をつづけるため、「文化大革命」のもたらす損失をできるだけ減らすため、また党内党外の多くの幹部を守るために、たゆみない努力をほらい、心血をそそいだ。周恩来同志は林彪・江青反革命集団の破壊行為とさまざまな形の闘争をすすめた。その逝去は、全党と全国各民族人民を限りなく悲しみに陥れた。この年の四月には、天安門事件をはじめ、周恩来総理を悼み、「四人組」に反対する強い抗議運動が全国的にまき起こった。この運動は、実質的には、鄧小平同志に代表される党の正しい指導を擁護することであり、それはのちに江青反革命集団を粉砕するうえで偉大な大衆的基礎をきずいた。当時、中央政治局と毛沢東同志は天安門事件の性格について誤った判断をくだし、鄧小平同志を党内党外のすべての職務から解任するという誤りを犯した。一九七六年九月、毛沢東同志が逝去すると、江青反革命集団は党と国家の最高指導権をのっとる陰謀活動に拍車をかけた。同年十月上旬、党中央政治局は党と人民の意志を体して、江青反革命集団を断固粉砕し、「文化大革命」という災難に終止符をうった。これは全党、全軍、全国各民族人民の長期にわたる闘争によってかちとられた偉大な勝利である。江青反革命集団を粉砕する闘争では、華国鋒、葉劍英、李先念らの同志が重要な役割を果たした。

(二二)「文化大革命」というこの全局的な、長期にわたる左よりの重大な誤りについて

は、毛沢東同志に主な責任がある。しかし、毛沢東同志の誤りは、究極的には偉大なプロレタリア革命家の犯した誤りであった。毛沢東同志は、わが党内と国家活動に存在する欠点の克服に日頃から意をそそいでいたが、晩年には多くの問題を正しく分析することができなくなったばかりか、「文化大革命」では是非を混同し、敵味方を混同するようになった。毛沢東同志は重大な誤りを犯しながらも、全党がマルクス、エンゲルス、レーニンの著作を真剣に学ぶことをしばしば要求し、自分の理論と実践はマルクス主義にもとづくもので、プロレタリアート独裁をうち固めるうえには欠かせないと一貫して考えていた。ここにかれの悲劇がある。毛沢東同志は全局的には「文化大革命」の誤りをずつとつづけていたが、一部の具体的誤りにたいしてはこれを制止し、是正し、党の一部の指導的幹部と党外の一部の知名人を保護し、一部の指導的幹部をふたたび重要な指導的ポストにつけた。かれは林彪反革命集団を粉碎する闘争を指導し、江青、張春橋らにたいしても重要な批判と摘発をおこない、最高指導権をのっとりとするかれらの野望を実現させなかった。こうしたことは、のちにわが党が「四人組」を首尾よく粉碎するうえで重要な役割を果たすことになった。かれは晩年、わが国の安全を守ることに依然として鋭い注意を向け、社会帝国主義の圧力をはねかえし、正しい対外政策を実行し、各国人民の正義の闘争を断固支援するとともに、三つの世界の区分についての正しい戦略と、わが国が永遠に覇をととなえない

という重要な思想を提起した。「文化大革命」の間も、わが党は崩壊することなく統一を維持することができ、国務院と人民解放軍は多くの必要な活動をすすめることができ、各民族、各階層の代表の参加する第四期全国人民代表大会も会議をひらいて、周恩来、鄧小平両同志を指導的の中核とする国務院の人選をおこなうことができた。わが国の社会主義制度の基盤は依然として存在し、社会主義経済建設はひきつづき進められ、わが国はいかかわらず統一を維持し、国際的にも重要な影響をおよぼした。これらの重要な事実は、毛沢東同志の大きな役割と切り離すことができない。これらすべてによって、とくに革命事業にたいする長期の偉大な貢献によって、中国人民は終始、毛沢東同志を自分たちの敬愛する偉大な指導者であり、教師であると見なしている。

(二三) 党と人民が「文化大革命」のなかで左よりの誤りや林彪・江青反革命集団とたたかったこの闘争は、困難にみちた曲がりくねったものであったが、一度も停止したことはなかった。——これらのことが「文化大革命」の全過程とそのきびしい試練によって明らかにされた。党の第八期中央委員会とそこで選出された政治局、政治局常務委員会および書記局のメンバーは、ほとんどが闘争の正しい側に立ったこと、わが党の幹部は、誤って打倒された者も、一貫して活動をつづけた者も、また前後して活動を回復した者も、その圧倒的多数が党と人民に忠実で、社会主義、共産主義の事業に確固とした信念を持っていたこと、また、打撃と迫害をうけた知識分



子、労働模範、愛国的民主人士、愛国華僑および各民族、各階層の幹部と大衆も、その圧倒的多数が祖国を愛し、党を支持し、社会主義を支持する立場を動揺させはしなかったこと、「文化大革命」で迫害され、命をうしなった劉少奇、彭德懷、賀竜、陶鑄ら党と国家の指導者をはじめ、その他すべての党内党外の同志は、各民族人民の心の底に永遠に銘記されるであろう。全党および広範な労働者、農民、解放軍の指揮員・戦闘員、知識分子、知識青年、幹部の共同の闘争があったからこそ、「文化大革命」による破壊はある程度歯止めがかけられたのである。わが国の国民経済は大きな損失をうけたものの、やはり前進をとげた。食糧の生産はかなり安定した発展をつづけた。工業・交通、基本建設、科学技術の面では数かずの重要な成果をあげたが、そのなかにはいくつかの新しい鉄道と南京長江大鉄橋の完成、先進的なくつかの大型企業の操業開始、水素爆弾の実験と人工衛星の打ち上げ回収の成功、早熟型交雑種水稻の育成と普及などの成果が含まれている。国が動乱のさなかにある状況のもとでも、人民解放軍は祖国の安全を勇敢に守った。対外活動でも新しい局面を切りひらいた。もちろん、これらすべては決して「文化大革命」の成果ではない。もし「文化大革命」がなかったなら、われわれの事業ははるかに大きな成果をおさめていたであろう。「文化大革命」で、林彪、江青の二つの反革命集団による破壊をうけたが、われわれはついにかれらにうち勝った。党、人民の政権、人民の軍隊および社会全体

の性格はいずれも変わりはしなかった。わが人民が偉大な人民であり、わが党と社会主義制度が偉大で頑強な生命力を持っていることを、歴史はまたもや立証したのである。

(二四) 「文化大革命」が起こり、それが十年もつづいたことについては、さきに分析した毛沢東同志の指導上の誤りという直接の原因のほかにも、複雑な社会的、歴史的原因がある。それは主として次のとおりである。

一、社会主義運動の歴史は浅いが、社会主義国の歴史はさらに浅い。社会主義社会の発展法則のうち、一部はすでにかなりはつきりしているが、より多くのものはなお今後の模索に待たなければならぬ。わが党はかつて長い間、戦争と激烈な階級闘争の環境に置かれていたため、急速に到来した新しい社会主義社会や全国的規模の社会主義建設事業については、十分な思想的準備と科学的研究に欠けていた。マルクス、エンゲルス、レーニン、スターリンの科学的著作はわれわれの行動の指針ではあるが、わが国の社会主義事業のさまざまな問題に出来合いの答案を提供するわけにはいかない。指導思想の点から見ると、わが党には特有の歴史的特徴があるため、社会主義的改造を基本的になしとげたあと、社会主義社会の発展過程にあらわれる政治、経済、文化など各分野の新しい矛盾、新しい問題を考察し処理する場合、すでに階級闘争には属していない問題をあいかわらず階級闘争であると見なしがちであり、また、新しい条件のもとでの階級闘

争に直面した場合にも、以前に使いなれてはいるが、この時期にはもはやそのまま持ちこめない大がかりな嵐のような大衆闘争という従来の方法と従来の経験を踏襲して、階級闘争の重大な拡大をまねきがちである。同時に、マルクス、エンゲルス、レーニン、スターリンの著作のなかの一部の構想や論点を誤って理解し、あるいはドグマ化したため、こうした現実生活から逸脱した主観主義的な思想や方法は「理論的根拠」があるかのような錯覚をあたえてしまった。たとえば、社会主義社会では、消費財分配のさいの等量労働の相互交換という平等の権利、つまりマルクスのいう「ブルジョアの権利」を制限、批判すべきであり、したがって、労働に応じた分配の原則と物質的利益の原則も制限し、批判すべきであると考えたこと、社会主義的改造が基本的になしとげられたあとも、小生産が毎日、毎時間、資本主義とブルジョアジーを大量に生み出していると考えたため、都市と農村で左よりの一連の経済政策と階級闘争政策をおこなうようになったこと、また、党内の思想上の意見のくいちがいはすべて社会の階級闘争の反映であると考えたため、激しい党内闘争を頻繁におこなうようになったことなどである。このため、われわれは階級闘争拡大化という誤りをマルクス主義の純潔性を守ることだと勘違いすることになった。このほか、ソ連の指導者が中ソ論戦を挑発して、両党間の原則上の論争を国家間の紛争に変え、中国に政治上、経済上、軍事上の大きな圧力をかけてきたため、われわれはソ連の大国的排外主義に

反対する正義の闘争をすすめないわけにいかなくなった。しかし、こうした状況の影響をうけて、われわれは国内でも修正主義反対・修正主義防止の運動なるものをすすめ、階級闘争拡大化の誤りが日ましに党内で深刻化することになった。このため、党内の同志間の異なった意見をめぐる正常な論争も、いわゆる修正主義路線のあらわれであるとか、路線闘争のあらわれであるとかと見なされ、党内関係は日ましに緊張していった。こうして、党は毛沢東ら諸同志の提起するいくつかの左よりの観点を拒みきれなくなり、こうした左よりの観点が発展して、「文化大革命」の発生と持続をまねいたのである。

二、党が活動の重点を社会主義建設という新しい課題に切りかえ、とりわけ慎重を期さなければならなくなったその時期に、毛沢東同志の威信も頂点に達した。毛沢東同志は次第におごりたかぶり、実際から離れ、大衆から浮きあがり、日ましに主観主義、独断専行の作風をつのらせ、日ましに党中央のうえに身を置くようになった。このため、党と国家の政治活動における集団指導の原則と民主集中制は、たえず弱められ、破壊されるようになった。こうした現象は次第に生まれてきたもので、党中央もこれにはある程度の責任を負わなければならない。マルクス主義の観点によると、この複雑な現象は一定の歴史的条件のもとに生れたものである。もしもその責任をある個人、またはいく人かの者にのみおしつけるなら、全党はここから深い教訓を汲み取るこ

とも、実効ある改革の段取りを見つけることもできなくなってしまふ。共産主義運動において、指導者というものは非常に重要な役割をもっている。この点については、歴史がくりかえし立証しており、疑いの余地もない。だが、国際共産主義運動の歴史上、指導者と党との関係の問題を正しく解決しなかったためにある種の重大な偏向が生まれ、それによってわが党にも消極的な影響がもたらされた。中国は封建制の歴史の非常に長い国である。わが党は封建制、わけても封建的土地制度や豪紳・悪覇ともっとも断固たる、もっとも徹底した闘いをすすめ、反封建闘争のなかですぐれた民主的伝統をそだてた。だが、長期にわたる封建的専制主義の、思想・政治面における害毒は、やはり簡単に一扫しうるものではなかった。また、さまざまな歴史的原因によっても、われわれは共産党の内部における民主と国家の政治・社会生活における民主とを制度化し、法律化することができず、また法律をつくったとしても、しかるべき権威をもたせることができなかった。このために生まれた条件によって、党の権力があまりにも個人に集中しすぎ、党内に個人の独断専行と個人崇拜の現象がはびこることとなり、党と国家は「文化大革命」の発生と発展を防ぎ、おしとどめることができなくなったのである。

### 歴史の偉大な転換

(二五) 一九七六年十月、江青反革命集団を粉砕した勝利は、危機のなかから党を救い、革命を救い、わが国を新しい歴史的発展の時期へと進みいらせた。この時から十一期三中総にいたる二年間、広範な幹部と大衆は絶大な熱情をもって革命と建設のさまざまな活動に取りくんだ。江青反革命集団の犯罪行為を摘発・批判し、かれらの反革命的派閥体系を徹底的に審査・粛清する仕事は、大きな成績をあげた。党と国家の組織を整頓し、冤罪・でっちあげ・誤審の事件について誤った決定を破棄する仕事も、少しづつ開始された。工・農業生産もかなり急速に回復し、教育・科学・文化の活動も正常な状態にもどりはじめた。こうして、「文化大革命」の誤りの是正を求める党内党外の同志たちの声はますます強くなったが、それは大きな障害につきあたった。これは十年間の「文化大革命」のもたらした政治上、思想上の混乱が短期間では容易に取りのぞけないためであるが、同時にまた、当時、党中央の主席であった華国鋒同志が指導思想の面でひきつづき左の誤りを犯したためでもある。華国鋒同志は、一九七六年の「鄧小平批判」運動のさい、毛沢東同志の提議によって党中央第一副主席となり、國務院総理を兼ねることになった。華国鋒同志は江青反革命集団を粉砕する闘争で功績をたて、その後も有益な仕事をした。だ

が、華国鋒同志は「二つのすべて」つまり、「毛主席の決定したことはすべて断固として守らなければならず、毛主席のくだした指示はすべて終始変わることもなく守らなければならない」というあやまった方針をとり、これをなかなか改めようとしなかった。一九七八年には混乱を收拾するうえで重要な意義をもつ、真理の基準についての討論の展開をおさえつけた。また、古参の幹部を活動に復帰させる仕事や、歴史上の冤罪・でっちあげ・誤審の事件（「天安門事件」を含む）の誤った決定を破棄する仕事を引きのばし、これを妨害した。さらに、以前の個人崇拜をひきつづき残すとともに、自分自身にたいする個人崇拜までもつくり出し、それを受け入れた。一九七七年八月に開かれた中国共産党第十一次全国代表大会は、「四人組」を摘発・批判し、社会主義の現代化された強国の建設を全党に呼びかける面で、積極的な役割を果たした。だが、当時の歴史的条件の制約と華国鋒同志の誤りの影響をうけて、この大会では「文化大革命」の誤った理論、政策、スローガンを是正するどころか、逆にそれを是認する結果になった。経済活動で功をあせりすぎたことや、そのほか一部の左よりの政策をとりつづけたことについても、華国鋒同志には責任がある。華国鋒同志の指導のもとでは、党内の左よりの誤りを是正すること、とくに党のすぐれた伝統を復活させることが不可能なことは、非常にはつきりしている。

(二六) 一九七八年十二月に開かれた十一期中総は、建国いろいろのわが党の歴史上、きわめて深い意義をもつ偉大な転換点であった。総会は、一九七六年十月いろいろ、党の活動が曲折をくりかえしながら前進してきた局面に終止符をうち、「文化大革命」とそれ以前の左よりの誤りを全面的かつ真剣に是正することに取いかかった。この総会は「二つのすべて」の誤った方針を断固批判し、毛沢東思想の科学的体系を全面的に正しく把握する必要があることを十分に確認した。総会は、真理の基準についての討論を高く評価し、思想を解放し、頭を働かせ、実事求是の態度をとり、一致団結して前向きの姿勢をとるという指導方針を確立した。総会は、「階級闘争をカナメとする」という社会主義社会には合わないこのスローガンをもはや使わないことに決めた。活動の重点を社会主義的現代化建設に移す戦略的決定をおこなった。総会は、国民経済のひどいアンバランスの解決に意をそそぐよう要求し、農業の発展を速めることについての決定を採択した。総会は、社会主義の民主を健全化し、社会主義の法秩序を強化するという任務をとくに提起した。総会は、党の歴史におけるいくつかの重要な冤罪・でっちあげ・誤審の事件と一部の重要な指導者の功罪および是非の問題を審査し、これを解決した。総会はまた、中央の指導機構のメンバーを増やした。指導活動において重要な意義をもつこれらの変化は、党が思想的、政治的、組織的にマルクス主義の正しい路線をふたたび確立したことを示している。この時いら

い、党は混乱した状態を正しい状態にもどす主動権を握り、建国いろいろ歴史的に残されてきた多くの問題や現実の生活に現われてくる新しい問題を段取りをもって解決し、建設と改革の繁雜な仕事をすすめて、わが国の政治面、経済面にすばらしい情勢を生み出した。

一、三中総のうち出した思想解放、実事求是の呼びかけのもとに、広範な幹部と大衆はこれまで流行した個人崇拜と教条主義の精神的な枷かぎからぬけ出した。このため、党内党外の思想は活気にみちあふれ、新しい状況の研究と新しい問題の解決につとめる気はつらつとした様相が現われるようになった。思想解放の方針を正しく貫徹するため、党はいちはやく、社会主義の道を堅持し、人民民主主義独裁つまりプロレタリア独裁を堅持し、共産党の指導を堅持し、マルクス・レーニン主義と毛沢東思想を堅持するという四つの基本原則をあらためて明らかにし、民主と集中のいずれにかたよってもならないという原理をかさねて明らかにした。党はまた、階級としての搾取階級はすでに消滅したが、階級闘争はなお一定の範囲でひきつづき存在しているという基本的事実を指摘した。党の四中総で採択された建国三十周年慶祝大会における葉劍英同志の演説は、建国いろいろ、党と人民のおさめた偉大な成果を確認するとともに、これまでの活動における党の誤りを自己批判し、国の輝かしい前途を論証し、全党と全国各民族人民の認識の統一を強めた。一九八〇年八月の中央政治局会議は、ブルジョア思想の侵食に反対し、政治面、思想

面における封建主義の害毒を一掃するという歴史的任務をうち出した。同年十二月の中央工作會議は、党の思想政治活動を強化すること、社会主義的精神文明の建設を強化すること、四つの基本原則にそむく誤った思潮を批判すること、社会主義の事業を破壊する反革命活動に打撃をあたえることを決定して、安定団結の気はつらつとした全国の政治的局面にきわめて大きな良い影響をおよぼした。

二、一九七九年四月に開かれた中央工作會議で、党は国民経済全体にたいする「調整・改革・整頓・向上」の方針をうち出し、過去二年の経済活動における失策を断固是正し、これまでこの面に長いあいだ存在した左よりの誤りの影響を真剣に一掃した。党は、経済建設はわが国の国情に合致し、経済法則と自然法則に合致していなければならないこと、力相応の仕事に取りくみ、順序を追って前進し、かならず論証をおこない、実際の効果を重視し、生産の発展と人民生活の改善とを緊密に結びつけなければならないこと、また独立自主、自力更生の堅持を土台に諸外国との経済協力と技術交流を積極的に展開しなければならないことなどを指摘した。こうした方針に導かれて、軽工業の発展は速まり、工業の内部構造は合理的なバランスのとれた方向に向かつて発展している。また企業の自主権拡大、労働者・職員代表大会制度の復活、企業の民主的管理、財政の段階別管理などを含む经济管理体制の改革も、経済調整と結びつけながら段取りを追

って進められている。党は農業協同化後期いろいろの農村工作における失策を真剣に是正し、農産物と副産物の価格を引きあげ、生産量に応じて報酬を計算するさまざまな形態の責任制を實行し、自留地の復活とその適度な拡大をはかり、農村の市取引を復活させ、農村の副業と多角経営を發展させ、農民の積極性を大いに發揮させた。この二年間の食糧生産高は建国いろいろ最高で、工芸作物と農業副産物の生産も急速に發展している。農業と国民経済全体の發展によって、人民生活は改善された。

三、もと中共中央副主席で、中華人民共和国主席でもあった劉少奇同志をはじめ、無実の罪を着せられた党と国家のその他の指導者と各民族、各界のその他の指導者は、大量の確実な調査研究によって名誉を回復し、その革命闘争で党と人民のためにうち立てた歴史的功績を確認された。

四、大量の冤罪・でっちあげ・誤審の事件を全国的に再調査して、誤った決定をくつがえし、誤って右派分子と判定された事件についても是正をおこなった。もとの工商業者はすでに改造されて勤労者となっていること、もともと勤労者であった零細商人、行人、手工業者はもとのブルジョア工商業者と区別すること、すでに改造されて勤労者となっている圧倒的多数のもと地主、富農分子はその階級所屬を改めることなどが公表された。こうした一連の活動によって、党

内と人民内部の大量の矛盾が適切に解決された。

五、各級の人民代表大会の活動が強化され、省・県二段階の人民代表大会に常設機関が増設されたほか、県段階および県段階以下の人民代表は選挙民が直接選挙するという制度が全国で実施されている。党と国家の集団指導と民主集中制は健全化されつつある。地方と基層組織の権力も、次第に拡大されている。社会主義の民主を發揚するのに不利な「大鳴・大放・大字報・大弁論」なるものは廃止された。建国いろいろと制定されいなかった刑法と刑事訴訟法を含め、一連の重要な法律、法令、条例が復活、制定、実施された。司法・検察・公安機関の活動も強化され、さまざまな重大な刑事犯に打撃が加えられている。林彪・江青反革命集団の主犯十名は法にもとづいて公判にかけられた。

六、党は各級指導グループの調整と強化に力をいれた。五中総は政治局常務委員会委員を補充し、中央書記処を置き、中央の指導力を大いに強めた。中央と各級の規律検査委員会が設立されたこと、『党内の政治生活に関する若干の準則』およびその他の党内法規が制定されたこと、各級の党の指導部門や規律検査部門が不正の気風を是正するために活動をおこなったことなどによって、党の戦闘力は強まった。党の言論機関もこの面で多くの努力を払った。党は、事実上存在している幹部指導職の終身制を廃止し、権力のあまりに集中しすぎた状況を改めるとともに、革

命化の堅持を前提として各級指導者の若返り、知識化、専門化を逐次実現するよう要求し、この面の仕事に一部着手した。國務院の指導メンバーを調整し、党と政府の分担を明確にしたため、中央と地方の政府の活動は強化された。

このほか、党は、教育・科学・文化・衛生・体育についての活動、民族関係の活動、統一戦線の活動、華僑関係の活動、軍事面の活動、外交面の活動などの諸分野で党の諸政策を真剣に実行し、それぞれ重要な成果をおさめた。

要するに、三中総いらい、毛沢東思想の科学的原理と党の正しい政策は新しい条件のもとで復活、発展し、党と国家のさまざまな活動がふたたび勢いよくもりあがっている。われわれの活動にはまだ失策や欠点があり、われわれの前にはまだ多くの困難がある。だが、勝利のうちに前進する道はすでに切りひらかれており、人民の間で党の威信はいま日まじに高まっている。

### 毛沢東同志の歴史的的位置と毛沢東思想

(二七) 毛沢東同志は偉大なマルクス主義者であり、偉大なプロレタリア革命家、戦略家、理論家である。毛沢東同志は十年にわたる「文化大革命」で重大な誤りを犯したとはいえ、その全生涯からみると、中国革命にたいする功績は、過ちをはるかにしのいでいる。毛沢東同志にあっ

ては、功績が第一義的で、誤りは第二義的である。毛沢東同志は、わが党と中国人民解放軍の創設および発展のため、中国各民族人民の解放事業の勝利のため、中華人民共和国の創建とわが国の社会主義事業の発展のために、不滅の功績をうち立てた。毛沢東同志は、世界の被抑圧民族の解放と人類の進歩をめざす事業に大きな貢献をした。

(二八) 毛沢東同志を主要な代表とする中国の共産主義者は、マルクス・レーニン主義の基本的原理にもとづいて、長期にわたる中国革命の実践で一連の独創的な経験を理論的に総括し、中国の実情に適した科学的な指導思想をつくりあげた。これがマルクス・レーニン主義の普遍的原理と中国革命の具体的実践とを結びつけた所産としての毛沢東思想である。半植民地・半封建的なアジアの大国で革命をおこなえば、多くの特殊で複雑な問題につきあたるのは避けられない。マルクス・レーニン主義の一般の原理を暗記したり、外国の経験を丸写しにしたりするのは、これらの問題を解決することは不可能である。主として今世紀の二十年代の後期と三十年

代の前期、国際共産主義運動とわが党内に流行したマルクス主義をドクマ化し、キャンペーンの決議とソ連の経験を神聖視する誤った傾向は、中国革命をほとんど絶体絶命の境地におとしめた。毛沢東思想は、このような誤った傾向とたたかい、この面の歴史的経験をほりさげて総括する過程で、一步一步と形成され、発展してきたものである。それは、土地革命戦争の後期と抗

日戦争の時期に系統的に総括され、多方面にわたる展開の過程で成熟し、解放戦争の時期と中華人民共和国の成立後にひきつづき発展したものである。毛沢東思想は、マルクス・レーニン主義の中国における運用と発展であり、実践によってその正しさが立証された中国革命の正しい理論の原則と経験の総括であり、中国共産党の集団的な英知の結晶である。わが党の多くのすぐれた指導者は、みなそれらの形成と発展に重要な貢献をしてきたが、毛沢東同志の科学的著作はその集中的な概括である。

(二九) 毛沢東思想の内容は多方面にわたるものである。それは、次の諸方面での独創的な理論によって、マルクス・レーニン主義を豊富にし、発展させた。

一、新民主主義革命について。毛沢東同志は、中国の歴史的状況と社会的状況から出発し、中国革命の特徴と中国革命の法則を深く研究して、民主主義革命におけるプロレタリアートの指導権についてのマルクス・レーニン主義の思想を発展させ、プロレタリアートの指導する、労働同盟を基礎とした人民大衆の反帝・反封建・反官僚資本主義の新民主主義革命についての理論をうち立てた。この面のおもな著作には、『中国社会各階級の分析』、『湖南省農民運動の視察報告』、『小さな火花も広野を焼きつくす』、『共産党人』発刊のことは、『新民主主義論』、『連合政府について』、『当面の情勢とわれわれの任務』がある。その基本的論点は、まず第一に、

中国のプロレタリアートは二つの部分からなり、一部は帝国主義に依存する大ブルジョアジー(買弁ブルジョアジー、官僚ブルジョアジー)、他の一部は革命を求めているが動揺もしている民族ブルジョアジーであると認めている点である。プロレタリアートの指導する統一戦線は、民族ブルジョアジーの参加をかちとらなければならず、特殊な条件のもとでは大ブルジョアジーの一部をも含めて、もつとも主要な敵を最大限に孤立させなければならない。ブルジョアジーと統一戦線を結成する場合には、プロレタリアートの独自性を保持し、団結もすれば闘争もし、闘争によって団結を求めるといふ政策をとらなければならない。また、ブルジョアジー、主として大ブルジョアジーとの分裂をよぎなくされた場合には、大ブルジョアジーを相手に大胆かつ巧みに断固とした武装闘争をすすめる、同時にひきつづき民族ブルジョアジーの支持または中立をかちとらなければならない。基本的論点の第二は、中国にはブルジョア民主主義がなく、反動支配階級が武力をたのんで人民への独裁テロ支配をおこなうため、革命は長期の武装闘争を主要な形態とするよりほかはないと認めている点である。中国の武装闘争は、プロレタリアートの指導する、農民を主体とした革命戦争である。農民はプロレタリアートのもつとも信頼できる同盟軍である。プロレタリアートは、自らの前衛を通じ、その先進的な思想と組織性、規律性によって農民大衆の意識をたかめ、農村根拠地をうち立て、長期にわたる革命戦争をすすめて、革命勢力の



発展と成長をはかることが可能であり、またそうすることが必要でもある。毛沢東同志は、「統一戦線と武装闘争は敵のうち勝つ二つの基本的な武器」であると指摘し、これに党建設を加えて、革命の「三つの宝」と言っている。上に述べたことこそ、中国共産党が全民族の指導の中核となり、農村で都市を包囲し、最終的に全国的勝利をかちとるという道をつくり出すことのできた基本的なよりどころである。

二、社会主義革命と社会主義建設について。毛沢東同志と中国共産党は、新民主主義革命の勝利によって生み出された社会主義への移行の経済的政治的条件にもとづいて、社会主義的工業化と社会主義的改造を同時にすすめる方針をとり、生産手段私有制を逐次改造する具体的政策を実行し、中国のように世界人口の四分の一近くを占め、経済と文化の立ちおくれた大国で社会主義制度を確立するという困難にみちた課題を理論と実践の面から解決した。毛沢東同志は、人民内部における民主の面と反動派にたいする独裁の面とを結びつけたものが人民民主主義独裁であるという理論を提起し、プロレタリアート独裁についてのマルクス・レーニン主義の学説を豊富にした。社会主義制度がうち立てられてのち、毛沢東同志はこう指摘している。社会主義制度のもとでは、人民の根本的利益は一致しているが、人民の内部にはなおさまざまな矛盾が存在している。敵味方の矛盾と人民内部の矛盾を厳密に区別し、正しく処理しなければならない。

と。毛沢東同志は、人民の内部において、政治の面では「団結——批判——団結」、党と民主党派との関係の面では「長期共存・相互監督」、科学・文化の面では「百花齊放・百家争鳴」、また、経済活動の面では全国の都市と農村の各階層にたいして全般的な調整をおこない、国家、集団、個人の三者の利益を配慮するなど一連の正しい方針を実行すべきであると主張した。毛沢東同志は、中国が大きな農業国であるという状況から出発して、農業を基礎とし、重工業と農業、軽工業との関係を正しく処理し、農業と軽工業の発展を十分に重視し、わが国の国情に適した中国工業化の道をさがしあてる必要があると強調し、また外国の経験を機械的に導入してはならない、としばしば強調した。毛沢東同志はまた、社会主義建設のなかでは、経済建設と国防建設、大型企業と中・小型企業、漢民族と少数民族、沿海地帯と内陸地帯、中央と地方、自力更生と外国への学習などの諸関係をたくみに処理するほか、蓄積と消費の関係をたくみに処理し、総合的なバランスをとることに意をそそぐべきだと強調した。毛沢東同志はまた、労働者は企業的主人公であるから、幹部の生産労働への参加と労働者の企業管理への参加、不合理な規程・制度の改革、ならびに技術者・労働者・幹部の「三結合」を実行すべきであると強調した。毛沢東同志は、あらゆる積極的要素を動員し、消極的要素を積極的要素に変え、全国各民族人民を結集して社会主義の強大な国家を建設するという戦略的思想を提起した。社会主義革命と社会主義建設について

ての毛沢東同志の重要な思想は、『中国共産党第七期中央委員会第二回総会での報告』、『人民民主主義独裁について』、『十大関係について』、『人民内部の矛盾を正しく処理する問題について』、『拡大中央工作会議における講話』などの主要な著作に集約されている。

三、革命的軍隊の建設と軍事的戦略について。毛沢東同志は、主として農民からなる革命的軍隊を、いかにしてプロレタリアの性格の、厳格な規律をもつ、人民大衆と緊密に結びついた、新しい型の人民軍隊にきずきあげるかという問題を系統的に解決した。毛沢東同志は、誠心誠意、人民に奉仕することが人民の軍隊の唯一の目的であると規定し、鉄砲が党を指揮するのではなく、党が鉄砲を指揮するのだという原則を定め、三大規律・八項注意を制定し、政治、経済、軍事の三大民主の実行を強調し、将校と兵士との一致、軍隊と人民との一致、敵軍を瓦解させることなどの原則の実行を強調し、軍隊の政治工作における一連の方針と方法を提起し、総括した。

毛沢東同志は『党内のあやまった思想の是正について』、『中国革命戦争の戦略問題』、『抗日遊撃戦争の戦略問題』、『持久戦について』、『戦争と戦略の問題』などの軍事的著作のなかで、中国の長期にわたる革命戦争の経験を総括したあと、人民の軍隊を建設する思想を系統的に提起し、人民の軍隊を中核とし、広範な人民大衆に依拠し、農村根拠地をうち立て、人民戦争をすすめるという思想をうち出した。毛沢東同志は遊撃戦争を戦略的な次元にまで引きあげ、中国の革

命戦争の長期にわたる主な戦闘形態は遊撃戦と遊撃的性格をおびた運動戦であると見なした。毛沢東同志は、敵味方の力関係の変化と戦争の発展にもなつて軍事的戦略の転換を正しくおこなうべきであると論じた。毛沢東同志は革命的軍隊のために、敵が強く味方が弱い情勢のもとでは、戦略的な持久戦と戦役・戦闘での速決戦を実行し、戦路上の劣勢を戦役・戦闘での優勢へ転換させ、優勢な兵力を集中して敵を各個に殲滅するなど、人民戦争の一連の戦略、戦術をあみ出した。毛沢東同志は、解放戦争のさい、有名な十大軍事原則をまとめあげた。これらは、マルクス・レーニン主義の軍事理論にたいする毛沢東同志のきわだつた貢献である。建国後、毛沢東同志は、国防の強化、現代化した革命武装力（海軍、空軍およびその他の技術的兵種）の建設、現代化した国防技術（防御のための核兵器をも含む）の発展という重要な指導思想を提起している。

四、政策と戦術について。毛沢東同志は革命闘争において政策と戦術がきわめて重要なことについての確な論証をおこない、政策と戦術は党の生命であり、革命的政党のすべての行動の出発点と帰結であるとし、政治情勢、階級的関係ならびに実際の状況とその変化に応じて党の政策をつくり、原則性と弾力性を結びつけなければならない、と指摘した。そして、敵にたいする闘争と統一戦線などの面で数々の重要な政策と戦術の思想を提起した。毛沢東同志はつぎのようにの

べた。弱小な革命勢力が、変化しつつある主観的、客観的条件のもとで、強大な反動勢力に最終的にうち勝つには、戦略的には敵を蔑視し、戦術的には敵を重視しなければならない。闘争の主要な方向を把握し、四方に出撃してはならない。敵に対してはそれを区別して対処し、分化、瓦解させなければならない。矛盾を利用し、多数を獲得し、少数に反対し、各個に撃破するという戦術をとらなければならない。反動支配地区では、合法闘争と非合法の闘争を結びつけ、組織面では精鋭分子を隠へいする方針をとらなければならない。打倒された反動的階級の人たちと反動分子に対しては、謀反を起こしたり、攪乱行為を働かないかぎり、みな生活の活路をあたえ、自らの手で生活する勤労者に労働のなかで改造しなければならぬ。プロレタリアートとその政党が同盟者にたいする指導を実現するには、一、指導されるものを率いて共通の敵と断固としてたたかい、勝利をからとる、二、指導されるものに物質的利益をあたえるか、少なくともその利益を損わないようにすると同時に、政治教育をほどこす、という二つの条件をそなえていなければならない。毛沢東同志のこれらの政策、戦術の思想はかれの多くの著作のなかに具現されており、とりわけ『当面の抗日統一戦線における戦術の問題』、『政策について』、『二度目の反共の高まりを撃退することについての総括』、『当面の党の政策におけるいくつかの重要な問題について』、『四方に出撃してはならない』、『帝国主義とすべての反動派は真の虎であるかどうか』

かについて』などの著作に集中的に具現されている。

五、思想・政治工作および文化活動について。毛沢東同志は『新民主主義論』のなかで、「一定の文化（イデオロギーとしての文化）は、一定の社会の政治と経済の反映であり、また一定の社会の政治と経済に大きな影響をあたえ作用をおよぼし、そして、経済が基礎であり、政治は経済の集中的表現である」と指摘している。毛沢東同志はこの基本的観点に依拠し、この面できわめて深い意義をもつ重要な思想を提起した。たとえば、思想・政治工作は経済活動その他すべての活動の生命線であり、政治と経済との統一、政治と技術との統一を実行し、政治面では社会主義的自覚ももち、専門業務にも精通していなければならないという方針、民族的、科学的、大衆的な文化を発展させるという方針、百花斉放の方針と、古きをたずねて新しきを出し、昔のものを今に役立て、外国のものを中国に役立てるという方針、知識分子は革命と建設で重要な役割を果たし、労働者、農民と結びつき、マルクス・レーニン主義を学習し、社会と活動の実践を学習してプロレタリアートの世界観を樹立すべきだという思想などが、それである。毛沢東同志は「これのために奉仕するかということとは、根本的問題であり、原則的問題である」とし、誠心誠意人民に奉仕し、革命の仕事に極度に責任ある態度をとり、刻苦奮闘し、犠牲を恐れてはならないと強調した。毛沢東同志の思想・政治・文化についての多くの有名な著作、たとえば、『青年運動

の方向』、『知識分子を大量に吸収しよう』、『延安の文学・芸術座談会における講話』、『ベチューンを記念する』、『人民に奉仕する』、『愚公、山を移す』などは今日においても重要な意義がある。

六、党の建設について。プロレタリアートの戦闘力は強くても、その人数が非常に少なく、農民その他の小ブルジョアジーが人口の大多数を占めているような国では、広範な大衆的基礎をもつ、マルクス主義のプロレタリア政党をさすきあげることが、きわめて困難な課題である。毛沢東同志の党建設の学説は、この課題をみごとに解決した。この面の著作には、『自由主義に反対する』、『民族戦争における中国共産党の地位』、『われわれの学習を改革しよう』、『党の作風を整えよう』、『党八股に反対しよう』、『学習と時局』、『党委員会制度の健全化について』、『党委員会の活動方法』などがある。毛沢東同志はとくに思想面からの党建設に重点をおき、黨員は組織面から入党するばかりでなく、思想面からも入党し、つねづねプロレタリア思想でさまざまな非プロレタリア思想を改造し、克服するよう心がける必要があると主張した。毛沢東同志は、理論と実践とを結びつける作風、人民大衆と緊密に結びつく作風および自己批判の作風こそ、中国共産党がその他の政党と区別されるいちじるしい目じるしである、と指摘した。毛沢東同志は、かつて党内闘争で犯された「無慈悲な闘争、容赦のない打撃」という左よりの誤りにた

いして、「前の誤りを後の戒めとし、病を治して人を救う」という正しい方針をうち出し、党内の闘争では思想もはつきりさせ、同志たちとも団結するという目的をとげる必要があると強調した。毛沢東同志は、批判と自己批判を通じて全党的なマルクス・レーニン主義の思想教育運動をすすめる整風の形態をつくり出した。建国の直前と直後、毛沢東同志は、わが党が全国の政権を指導する政党となったことにかんがみ、われわれは謙虚で、慎しみ深く、おごらず、あせらない、刻苦奮闘の作風をもちつづけ、ブルジョア思想の侵食を警戒し、大衆から浮きあがる官僚主義に反対しなければならないと、しばしば呼びかけた。

(三〇) 毛沢東思想の真髄は、毛沢東同志の上記各構成部分につらぬかれた立場、観点、方法である。それには、実事求是、大衆路線、独立自主という三つの基本点がある。毛沢東同志は、弁証法的唯物論と史的唯物論をプロレタリア政党のすべての活動に運用し、長期にわたる中国革命のきびしい闘争のなかで中国共産主義者特有の終始一貫した立場、方法、観点をつくりあげ、このことよってマルクス・レーニン主義を豊富にし、発展させた。それは、『書物主義に反対する』、『実践論』、『矛盾論』、『農村調査』のはしがきとあとがき』、『指導方法のいくつかの問題について』、『人間の正しい思想はどこからくるのかについて』など、重要著作に具現されているばかりか、毛沢東同志の全著作、中国の共産主義者の革命活動に具現されてい

る。

一、実事求是とは、実際から出発して、理論を実際と結びつけることであり、マルクス・レーニン主義の普遍的原理を中国革命の具体的実践と結びつけることである。毛沢東同志は、中国の社会と中国革命の実際から離れてマルクス主義を研究することに一貫して反対した。早くも一九三〇年、毛沢東同志は書物主義への反対をうち出し、調査研究はすべての活動の第一歩で、調査がなければ発言権はないと強調していた。毛沢東同志は延安の整風運動の直前に、主観主義は共產党の大敵であり、党性が不純なことのあらわれであると指摘した。これらの精彩あふれる論断は、教条主義の束縛を打破して、人びとの思想を大いに解放した。毛沢東同志の哲学著作と、哲学思想にとむその他の多くの著作は、中国革命の経験、教訓を総括することによって、マルクス・レーニン主義の認識論と弁証法を深くほりさげて論述し、それを豊かなものにした。毛沢東同志は、弁証法的唯物論の認識論が能動的な革命の反映論であることをとくに明らかにし、わけでも客観的事実にもとづき、客観的事実と合致した自覚的能動性を十分に發揮するよう強調した。毛沢東同志は社会的実践を基礎として、認識の源泉、認識の発展過程、認識の目的、真理の基準についての理論を全面的かつ系統的に論述した。また、正しい認識の形成と発展のために、しばしば物質から精神へ、精神から物質へ、つまり実践から認識へ、認識から実践への反復

をくりかえさなければならぬと指摘した。さらにまた、真理は誤謬との比較において存在し、それとの闘争のなかで発展すると指摘し、真理はきわめることのできぬもので、具体的認識の是非、すなわち客観的認識に合致しているかどうかは、結局のところ、実践を経てのみ解決される、と指摘した。毛沢東同志は、マルクス主義的弁証法の核心である対立面の統一の法則を解明し、活用した。毛沢東同志は、客観的事物における矛盾の普遍性を研究する必要があるだけでなく、とりわけ重要なものはその特殊性を研究することである、また、性質の異なる矛盾を解決するには異なる方法によらなければならない、と指摘した。したがって、弁証法はこれを丸暗記するだけで強引に応用できる公式などと考えるはならず、かならずそれを実践と結びつけ、調査研究と緊密に結びつけて、弾力的に運用しなければならない。毛沢東同志は哲学を、プロレタリアートと人民大衆が世界を認識し、世界を改造するための鋭利な武器に真につくり変えた。なかでも、毛沢東同志が中国の革命戦争の問題について論述した重要な著作は、実践のなかでマルクス主義の認識論と弁証法を運用し、発展させたもつとも輝かしい手本となっている。毛沢東同志の上述の思想路線は、わが党が永遠に堅持しなければならない思想路線である。

二、大衆路線とは、すべては大衆のために、すべては大衆に依拠して、また、大衆のなかから大衆のなかへ、ということである。人民大衆こそ歴史の創造者であるというマルクス・レーニン

主義の原理を党の全活動に運用し、すべての活動における党の大衆路線をつくり出したこと——これは、敵味方の力関係がいちじるしく隔絶する困難な環境のなかでわが党が長期にわたり革命活動をすすめてきたこのうえなく貴重な歴史的経験を総括したものである。毛沢東同志はつねにこう強調していた。われわれが人民に依拠し、人民の創造力が無限であることを信じ、これをふまえて人民を信頼し、人民と一体になりさえすれば、いかなる困難にもうち勝つことができる。また、いかなる敵もわれわれを最終的に圧倒することはできず、われわれに圧倒されるだけである、と。毛沢東同志はまた、こう指摘した。大衆を指導してすべての実際活動をすすめる場合、指導部が正しい意見をもとうとするなら、かならず大衆のなかから大衆のなかへという方法をとる、指導と大衆との結合、一般的呼びかけと個別的指導との結合を實行しなければならぬ。つまり、大衆の意見を集中して、系統だった意見にし、これをふたたび大衆のなかにもちこんで、大衆に堅持させ、大衆の行動のなかでこれらの意見が正しいかどうかを検証するのである。この過程を何度もくりかえして、指導部の認識をより正しく、より生きいきとした、より豊富なものにするのである、と。このように、毛沢東同志はマルクス主義の認識論と党の大衆路線とを統一したのである。党は階級の前衛部隊であって、人民の利益のために存在し、奮闘するが、党は永遠に人民の小部分にすぎない。人民を離れば、党のすべての闘争と理想は実現しないばかり

か、なんらの意義もたなくなる。革命を堅持し、社会主義事業を前進させるには、わが党はかならず大衆路線を堅持しなければならない。

三、独立自主、自力更生は、中国の実際から出発し、大衆に依拠して革命と建設をすすめてきた必然的な結論である。プロレタリア革命は国際的な事業であり、各国のプロレタリアートの相互支援が必要である。だが、この事業をやりとげるには、なによりもまず、各国のプロレタリアートが自国に立脚点をおき、自国の革命勢力と人民大衆の努力に依拠して、マルクス・レーニン主義の普遍的原理を自国の革命の具体的実践と結びつけ、自国の革命事業をりっぱにやりとげなければならない。毛沢東同志は、われわれの方針は自分の力を根底とすべきで、わが国の実情に適した前進の道のみならずがしがあてて必要があること一貫して強調した。中国のような大国では、とりわけ主に自分の力に依拠して革命と建設の事業を發展させなければならない。われわれはかならず、あくまで奮闘する決意がなければならない。自国の、何億という人民の英知と力を信じ、それにたよらなければならない。さもなければ、革命と建設のいずれの面でも勝利をおさめることができず、たとえ勝利をおさめたとしても、それをうち固めることはできない。もちろん、中国の革命と建設は世界から孤立してはいないし、また孤立することもありえない。われわれはいかなる場合にも外国から援助を獲得し、わけてもわれわれに役立つ外国のすべての先進的

な事物を学びとらなければならない。鎖国と盲目的な排外、および大国主義的な思想と行動は、まったく誤りである。わが国は経済、文化の面で比較的立ちおくれてはいるが、われわれは世界のいかなる大国、強国、富める国にたいしてもみずからの民族的自尊心と自信を堅持しなければならず、奴隸根性まる出しの卑屈な態度をとることは絶対に許されない。建国前と建国後、われわれは党と毛沢東同志の指導のもとに、いかなる困難のまえにも独立自主・自力更生の決意を揺るがせず、また、いかなる外部からの圧力にも屈服せず、中国共産党と中国各民族人民のものをも恐れぬ英雄的な気概を示してきた。われわれは各国人民との平和共存、平等互助を主張する。われわれは独立自主を堅持するとともに、他国人民の独立自主の権利をも尊重する。自国の特徴に適した革命と建設の道は、ただその国の人民のみがみずからさがしあて、つくり出し、決定しうるものであり、いかなる人も自己の考えを他人におしつける権利はない。これこそが真の国際主義であり、さもなければ覇権主義になってしまう。今後の国際関係において、われわれは永遠にこの原則的立場を堅持するであろう。

(三) 毛沢東思想はわが党の貴重な精神的財産である。それは長期にわたってわれわれの行動を導くであろう。マルクス・レーニン主義と毛沢東思想によって育てられた党の指導者と多数の幹部は、これまでわれわれの事業が大きな勝利をからとるための基本的骨幹であったが、現在

と将来においても依然として社会主義的現代化建設の貴重な中堅である。毛沢東同志の重要著作は、多くが新民主主義革命の時期と社会主義的改造の時期に書かれたものであるが、いまなおわれわれのかならず学ばなければならぬものである。これは、歴史というものが途中で断ち切ることができず、もしも過去を知らなければ、当面の問題を知ることができないというただそれだけの理由によるのではない。それはまた、これらの著作に含まれる多くの基本的な原理、原則と科学的な方法が普遍的意義をもつもので、現在と将来においてもわれわれにとって重要な指導的役割をもつからである。したがって、われわれは毛沢東思想をひきつづき堅持し、その立場、観点、方法を真剣に学習し、運用して、実践のなかで生まれてくる新たな状況を検討し、新たな問題を解決しなければならない。毛沢東思想は、マルクス・レーニン主義の理論的宝庫に多くの新しい内容をつけ加えた。われわれは、毛沢東同志の科学的著作の学習をマルクス、エンゲルス、レーニン、スターリンの科学的著作の学習と結びつけるべきである。毛沢東同志が晩年に誤りを犯したからといって、毛沢東思想の科学的価値を認めることを拒み、わが国の革命と建設にたいする毛沢東思想の指導的役割を否定するというような態度は、完全な誤りである。だが、毛沢東同志の言葉にたいして教条主義的な態度をとり、およそ毛沢東同志の述べたことはすべて動かしえぬ真理で、丸写しにするか鵜呑みにするよりほかはないと考え、ひいては毛沢東同志の晩年にお

かした誤りを实事求是の態度で認めようとせず、新しい実践のなかでこれらの誤りに固執するというふうした態度も、これまたひじょうに正しくない。この二つの態度はいずれも、長期にわたる歴史の試練にたえぬいて科学的理論となった毛沢東思想を、毛沢東同志の晩年に犯した誤りから区別しないものであるが、こうした区別はきわめて必要なのである。われわれは、半世紀をこえる中国の革命と建設の過程でマルクス・レーニン主義の普遍的原理と中国の現実とを結びつけてきたすべての積極的成果を尊重し、新たな実践のなかでこれらの成果を運用し、発展させ、現実に即した新たな原理と新たな結論によってわが党の理論を豊富にし、発展させ、われわれの事業をマルクス・レーニン主義と毛沢東思想の科学的軌道に沿ってひきつづきおしすすめていかなければならない。

団結して、現代化した社会主義強国を建設するために奮闘しよう

(三二) 新たな歴史的時期におけるわが党の奮闘目標は、われわれの国家を現代的農業、現代工業、現代的国防、現代的科学技術をそなえた、高度の民主と高度の文明をもつ社会主義強国に一步一步とさきあげていくことである。われわれはまた、台湾の祖国復帰と祖国統一の大業をなしとげなければならない。われわれが建国後三十二年の歴史的経験を総括する根本的な

目的は、社会主義の道を堅持し、人民民主主義独裁つまりプロレタリアト独裁を堅持し、共産党の指導を堅持し、マルクス・レーニン主義と毛沢東思想を堅持するというこの四つの基本原則をふまえて、全党、全軍、全国各民族人民の意志と力を現代化した社会主義強国の建設とこの偉大な目標にさらに集中させることにある。四つの基本原則は、全党が団結し、全国各民族人民が団結するための共通の政治的基礎であり、社会主義的現代化建設の事業を順調にすすめるための根本的な保証でもある。四つの基本原則から離れた言論と行動は、すべて誤りである。四つの基本原則を否定し、破壊する言論と行動は、すべて許されるべきではない。

(三三) 中国を救いようのは、社会主義だけである。これは、中国の各民族人民が百余年にわたる切実な体験から引き出した揺るがすことのできぬ結論であり、建国後三十二年のもっとも根本的な歴史的経験でもある。われわれの社会主義制度はいまなお低い段階にあるとはいえず、わが国がすでに社会主義制度をうち立て、社会主義社会に入っていることは、もはや疑いえない。この基本的事実を否定する観点はすべて誤りである。旧い中国では絶対に達成できない成果をわれわれが社会主義の条件のもとでかち得たことは、社会主義制度の優位性を、初歩的ではあるが力強く示している。われわれが自分の力でさまざまな困難にうち勝つことができたのも、同様に社会主義制度が強大な生命力を持っている証拠である。もちろん、われわれの社会主義制度が比



較的不完全なものから比較的完全なものになるには、どうしても長い過程を経なければならぬ。だからこそ、われわれは社会主義の基本制度を堅持する前提のもとで、生産力発展の必要と人民の利益に合わない具体的制度を改革することにつとめ、社会主義を破壊するすべての活動と断固たたかうことが要求されるのである。われわれの事業の発展にともない、社会主義のきわめて大きな優位性はますますはっきりと示されるにちがいない。

(三四) 中国共産党がなければ、新しい中国はなかった。同様に、中国共産党がなければ、現代化した社会主義の中国もありえない。中国共産党は、マルクス・レーニン主義と毛沢東思想で武装された、共産主義の最終的実現を歴史的使命とする、きびしい規律を持つ、自己批判の精神に富むプロレタリアートの政党である。もしもこの党の指導がなく、この党が長期にわたる闘争で人民大衆との間にきずきあげた骨肉の關係がなく、また、この党が人民の間ですすめた、困難をもともせぬ、きめこまかい効果的な活動と、これによってからえた高い威信がなければ、われわれの国家は内外のさまざまな原因によって、かならず四分五裂となり、わが民族と人民の前途は失われるほかないであろう。党の指導に誤りがないということはありえない。だが、党と人民との緊密な團結は、かならずこうした誤りを是正することができるであろう。党の犯した誤りにかこつけて、党の指導を弱めたり、そこから逸脱したり、それを破壊したりすることは、い

かなる人にも許されない。党の指導を弱め、そこから逸脱し、それを破壊すれば、いっそう大きな誤りを犯すだけであり、さらに大きな災難をまねくにちがいない。党の指導を堅持するには、党の指導を改善しなければならぬ。わが党は思想作風、組織状況、指導制度および大衆との結びつきなどの面に、依然として少なからぬ欠点が存在する。われわれはこれを断固克服しなければならぬ。われわれが党の指導を真剣に堅持し、たえず改善してゆくかぎり、わが党はかならず歴史のあたえた大きな責任をいっそうりっぱに担うことができる。

(三五) 三中総いらい、わが党は中国の国情に適した社会主義的現代化建設の正しい道を逐次確立してきた。この道は今後とも実践の過程でたえず充実し、発展していくであろう。だが、その主要な点は、すでに建国いらいの正反両面の経験、とりわけ「文化大革命」の教訓から基本的に総括されている。

一、社会主義的改造が基本的になしとげられてのち、わが国が解決しなければならない主要な矛盾は、人民の日ましに増大する物質的文化的欲望と立ち遅れた社会的生産との矛盾である。党と国家は、経済建設を中心とする社会主義的現代化建設の面に活動の重点をうつし、生産を大きく発展させ、それをふまえて、人民の物質的、文化的生活を逐次改善していかなければならぬ。われわれのこれまでの誤りは、結局のところ、この戦略的転換を断固としてやりとげなかつ

たばかりか、「文化大革命」の期間に、いわゆる「唯生産力論」という、史的唯物論にまったくそむいたデタラメな観点を提起したことにある。今後は、外敵の大規模な侵攻にみまわれた場合をのぞき（その場合でも、戦争が必要とし、また許容する範囲で経済建設をすすめなければならぬ）、絶対にこの重点から逸脱してはならない。党の各分野の活動はすべて経済建設というこの中心に従属し、これに奉仕しなければならず、全党の幹部、わけでも経済部門の幹部は経済理論、経済活動、科学技術の学習にとめなければならない。

二、社会主義の経済建設は、わが国の国情から出発して、力相応の仕事に取り組み、積極的に奮闘し、段取りを追い、段階を分けて現代化の目標を実現していくものでなければならない。これまで、われわれの経済活動に長期にわたって存在した左よりの誤りは主として、わが国の国情を離れ、現実の可能性を越えて、生産建設、経営管理の経済的效果と各分野の経済計画、経済政策、経済措置の科学的論証を無視し、そのため大量の浪費と損失をもたらした点に現われている。われわれは、科学的な態度をとり、深くほりさげて状況をつかみ、これを分析し、各分野の幹部、大衆と専門家の意見を真剣に聞き、客観的な経済法則と自然法則にもとづいて事を運ぶよう努め、各経済部門が比例に応じてバランスのとれた発展をするよう努めなければならない。われわれは、わが国の経済、文化がまだかなり立ち遅れているという基本的事実を見てとると同

時に、わが国の経済建設ですでにかちとった成果と経験や、国際的な経済技術交流の拡大など内外の有利な条件を見てとり、これらの有利な条件を十分に利用しなければならない。功をあせることにも反対し、消極的な気持ちになることにも反対しなければならない。

三、社会主義における生産関係の変革と改善は、生産力の状況に適應し、生産の発展に役立つのでなければならない。国营経済と集団経済はわが国の基本的経済形態であり、一定範囲における勤労者の個人経営経済は共有制経済の不可欠な補完物である。各種の経済構成要素に適した具体的管理制度と分配制度を確立しなければならない。共有制を土台として、計画経済を實行し、同時に市場メカニズムによる調節の補助的役割を發揮させなければならない。社会主義の商品生産と商品交換を大いに発展させなければならない。社会主義的生産関係の発展には、固定したモデルがあるわけではない。われわれの課題は、わが国の生産力発展の要求にもとづき、各段階でそれに適した、また前進をつづけるのに役立つ生産関係の具体的形態をつくり出していくことである。

四、階級としての搾取階級が消滅してのち、階級闘争はもはや主要な矛盾ではなくなった。だが、国内的要因と国際的影響によって、階級闘争はなお一定の範囲で長期にわたり存在し、ある種の条件のもとでは激化することもありうる。したがって、階級闘争を拡大化する観点にも反対

し、階級闘争はすでに消滅したとする観点にも反対しなければならない。社会主義を敵視するさまざまな危険分子の、政治、経済、思想・文化、社会生活の各分野におけるさまざまな破壊活動にたいしては、高度の警戒心をもち、効果的な闘争をおこなわなければならない。わが国の社会に大量に存在する、階級闘争の範囲には属さないさまざまな社会的矛盾については、これを正しく認識し、階級闘争とは異なった方法で正しく解決しなければならない。さもなければ、社会の安定団結をそこなうことになろう。結集しうるすべての勢力を断固として結集し、愛国統一戦線をうち固め、拡大しなければならない。

五、高度に民主的な社会主義的政治制度を一步一步と建設していくことは、社会主義革命の根本任務の一つである。建国いらい、この任務が重視されなかったことは、「文化大革命」が発生するにいたった重要な条件であり、これは痛ましい教訓である。民主集中制の原則にもとづいて各級国家機関の建設を強め、各級の人民代表大会とその常設機構を権威のある人民の権力機構にすぎあげ、基層の政権と基層の社会生活において人民の直接民主主義を次第に実現していかなければならない。わけても都市と農村の諸企業において、企業の業務にたいする勤労大衆の民主的管理を発展させることとくに努めなければならない。人民民主主義独裁をうち固め、国の憲法と法律の整備をはかり、それを何人も厳格に遵守しなければならない。不可侵の力にうち固め、社

会主義の法体系を、人民の権利を守り、生産の秩序、仕事の秩序、生活の秩序を保障し、犯罪行為に制裁をくわえ、階級敵の破壊活動に打撃をあたえるための強大な武器にしなければならない。どのような範囲においても、「文化大革命」に類似する混乱した局面が現われるのを二度と許してはならない。

六、社会主義は高度の精神文明をもつべきである。教育・科学・文化を軽視し、知識分子を差別視するまったく誤った考え方——かねてから存在したが、「文化大革命」の時期に頂点に達したこの考え方を一掃し、現代化建設における教育・科学・文化の地位と役割を高めることにつとめなければならない。知識分子が労働者、農民と同じように社会主義事業のたよるべき勢力であること、文化と知識分子がなければ社会主義は建設できないことを確認しなければならない。マルクス主義の理論にたいする研究、中国と外国の歴史と現状にたいする研究、さまざまな社会科学と自然科学の研究を全党で大いに強化しなければならない。思想政治工作を強化、改善し、マルクス主義の世界観と共産主義の倫理で人民と青年を教育しなければならない。徳育、知育、体育の全面的な発展をはかり、政治意識も高ければ専門業務にも精通することを提唱し、知識分子と労働者・農民、頭脳労働と肉体労働とを結びつける教育方針を堅持しなければならない。また、腐りはてたブルジョア思想と残存する封建思想の悪影響を排除し、小ブルジョア思想

の影響を克服し、祖国の利益を至上とする愛国主義的精神と、現代化建設にすべてをささげる刻苦奮闘の創業精神を発揚しなければならない。

七、社会主義的民族関係の改善と発展をはかり、民族の団結を強化すること——これはわが国のような多民族国家にとってきわめて大きな意義がある。民族問題については、これまでとくに「文化大革命」のさい、われわれは階級闘争拡大の重大な誤りを犯し、少数民族の幹部と大衆を数多く傷つけた。仕事のなかで、われわれは少数民族の自治権にたいする尊重が足りなかった。この教訓はかならず汲みとらなければならない。現在、わが国における民族間の関係は基本的には各民族の勤労人民相互の関係であることをはっきり認識しなければならない。民族の区域自治を堅持し、民族の区域自治の法体系整備に力を入れ、各少数民族地区がそれぞれの地区の実情にもとづいて党と政府の政策を貫徹する自主権を保証しなければならない。少数民族の地区に援助をあたえて経済・文化の発展をはかり、少数民族の幹部の養成と拔てきにつとめなければならない。民族の団結と民族平等を破壊するすべての言論と行動に断固反対すべきである。信仰の自由の政策をひきつづき貫徹しなければならない。四つの基本原則を堅持することは、宗教を信ずるものにはたいしてその信仰の放棄を求めめるのではなく、ただマルクス・レーニン主義と毛沢東思想に反対する宣伝をおこなってはならないとだけである。われわれは、宗教が政治に

介入しないこと、教育に介入しないことを要求するだけである。

八、戦争の危険が依然として存在する国際的条件のもとでは、現代化した国防力の建設を強化しなければならない。国防建設は、国の経済建設にふさわしいものでなければならぬ。人民解放軍は軍事訓練、政治工作、補給活動と軍事科学研究を強化し、戦闘能力をいちだんと高め、自分自身を現代化した強大な革命軍隊に一步一步ときぎあげていくべきである。また、軍隊の内部、軍隊と政府、軍隊と人民が緊密に団結するすぐれた伝統を回復し、発揚すべきである。民兵の建設もさらに強化しなければならない。

九、対外関係の面では、帝国主義、覇権主義、植民地主義および人種差別主義に反対し、世界平和を守る方針をひきつづき堅持しなければならない。平和共存の五原則をふまえて、世界各国との関係と経済・文化交流を積極的に発展させるべきである。また、プロレタリア国際主義を堅持して、被抑圧民族の解放事業、新興独立諸国の建設事業、各国人民の正義の闘争を支持しなければならない。

十、「文化大革命」の教訓と党の現状にもとづいて、わが党を健全な民主集中制をもつ政党にきぎあげなければならない。わが党は、かならず大衆闘争のなかで生まれた、政治的自覚も高く、実務の面でもすぐれた指導者による集団指導をおこなうべきであるとのマルクス主義的観点

を確立し、どのような形の個人崇拜をも禁止しなければならない。党の指導者の威信を守るともに、その活動を確実に党と人民の監督のもとに置かなければならない。高度の民主を基礎として高度の集中を實行し、少数が多数に服従し、個人が組織に服従し、下部が上級に服従し、全党が中央に服従しなければならない。権力の座にある党の党風の問題は、党の存亡にかかわる問題である。各級の党組織とすべての黨員幹部は大衆のなかに入り、実際のなかに入って、謙虚で、慎しみ深く、大衆と苦楽をともにし、官僚主義を断固克服しなければならない。われわれは批判と自己批判の武器を正しく運用して、党の正しい原則から離れたさまざまな誤った思想を克服し、派閥性を徹底的に排除し、無政府主義と極端な個人主義に反対し、特殊化などの好まぬ風を正さなければならない。われわれは党組織を整頓し、党の隊列の純潔化をはかり、人民をおさえつけている腐敗・変質分子を一掃しなければならない。党は政務その他の諸活動を指導する場合、党とその他の組織との関係を正しく処理して、国家の権力機関、行政機関、司法機関、および各種経済・文化組織がそれぞれの職権を効果的に行使できるように各方面から保証し、また労働組合、青年団、婦人連合会、科学者協会、文学・芸術家連合会などの大衆組織が主動的に責任をもって活動できるように各方面から保証しなければならない。党は党外人士との協力に力を入れ、中国人民政治協商會議にその役割を發揮さ

せ、国政の重大問題については民主党派および無党派の人たちと真剣に話し合い、かれらと各分野の専門家の意見を尊重しなければならない。各級の党組織は他の社会組織と同様、憲法と法律の許す範囲で活動しなければならない。

(三六) われわれは、一つの階級がもう一つの階級をくつがえす「プロレタリアート独裁下の継続革命」という「文化大革命」のスローガンの誤りを断固として是正した。だが、だからといって、革命の任務がすでに達成されたわけでは決してなく、各分野での革命闘争を断固としてすすめる必要がないというわけでは決してない。社会主義はすべての搾取制度と搾取階級を廃絶するだけでなく、社会的生産力を大いに発展させ、社会主義の生産関係と上部構造を改善、発展させるとともに、これを土台としてあらゆる階級の差異を逐次なくし、主に社会的生産力の発展不足からくるすべての重大な社会的格差と社会的不平等を逐次なくし、ついに共産主義を実現しなければならない。これは人類の歴史上かつてない偉大な革命である。現代化した社会主義国を建設するためにわれわれがいま進めている闘争は、この偉大な革命の一段階にほかならない。こうした革命は、搾取制度がくつがえされる以前の革命のように、はげしい階級間の抗争と衝突によって実現されるのではなく、社会主義制度そのものを通し、指導を得て、段取りを追ひ、秩序ただしくすすめられるのである。この平和的発展期に入った革命は、これまでの革命よ

りもさらに深刻で、さらに困難な革命である。それは非常に長い歴史的時期を経てはじめて達成されるばかりではなく、何世代も人びとのたゆまぬ努力、規律厳守の刻苦奮闘、英雄的な献身を必要としている。こうした平和的発展の歴史的時期においても、革命の道は決して波風の立たないものではない。公然とした敵やひそみかくれた敵、あるいはその他の破壊分子が依然として機に乗じて攪乱をおこなうため、われわれは革命的警戒心を十分に高め、いついかなる場合にも身を挺してたたかい、全力をつくして革命の利益をまもらなければならない。われわれすべての中国共産党員と全国各民族人民は新しい歴史的時期に崇高な革命的理想と旺盛な革命的闘志をもちつづけ、偉大な社会主義革命と社会主義建設を最後までおしすすめなければならない。

(三七) 建国後三十二年の成功と失敗、正しさと誤りをくりかえし対較したことによって、とくにここ数年らしいの思考と総括によって、全党の同志とわが国各民族の愛国的人民の政治的自覚は大いに高まった。社会主義革命と社会主義建設にたいするわが党の認識の程度は、明らかに建国後のいかなる時期の水準をも上回っている。わが党は自分の誤りを正視し是正する勇氣をもち、これまでのような重大な誤りのくりかえしを防ぎとめる決意と力をもっている。史的発展の長い目でみると、わが党の誤りと挫折は、結局、一時的な現象にすぎない。わが党と人民はこれによって鍛えられたこと、長期の闘争を経て党の中核的隊伍がさらに成熟していること、わが国

の社会主義制度の優位性がさらに顕著になっていること、祖国の隆盛を求める党と軍隊と人民がいよいよ意欲をもえあがらせていること、これこそ長期的に作用する決定的な要因である。われわれの社会主義事業には偉大な前途があり、わが国の幾億という各民族人民には偉大な前途がある。

(三八) 党の団結、党と人民との団結は、社会主義的現代化建設をすすめる、新しい勝利をかちとるための根本的な保証である。もしも全党がかたく一致団結し、また人民大衆とかく一致団結するなら、今後あれこれの困難につきあたるとしても、わが党と党の指導する社会主義事業は、かならず日まじに発展するにちがいない。

一九四五年、党の六期七中総で一致採択された『若干の歴史的課題についての決議』は、かつて全党の認識を統一し、全党の団結を強めて、人民の革命事業を急速に前進させ、偉大な勝利をおさめることができた。十一期六中総は、総会で一致採択した『建国いろいろの党の若干の歴史的課題についての決議』がかならずや同様の歴史的役割を果たすものと信じている。総会は、マルクス・レーニン主義と毛沢東思想の偉大な旗のもとに、全党、全軍、全国各民族人民が党中央のまわりに固く団結し、愚公、山を移すというあの精神をひきつづき発揚し、心を合わせ、あらゆる困難にもめげず、わが国を現代化した、高度に民主化した、高度に文明化した社会主義強國に一步

一歩きずきあげるため奮闘努力するよう呼びかける！ われわれの目的はかならず達成されなければならず、われわれの目的はかならず達成されるであろう！

# 中国共産党創立六十周年 祝賀集会での演説

(一九八一年七月一日)

胡 耀 邦

同志のみなさん、友人のみなさん！

本日、われわれはここに集まって、中国共産党創立六十周年を盛大に祝うことになった。この時にさいし、われわれは、わが党とわが国がいまや混乱を收拾して正常な秩序を回復し、先人の事業を受けつぎ発展させる重要な歴史的時期にさしかかっていることを痛感している。

混乱した状態を正しい状態にもどし、先人の事業を受けつぎ発展させるということ——これは、「文化大革命」の消極的な影響を徹底的に除去し、わが党が毛沢東同志とその他のふるい世代のプロレタリア革命家の指導のもとに切りひらいた偉大な事業をうけ継ぎ、中国人民の社会主義——共産主義の光明にみちた道をさらにきり拓いていくことである。

最近ひらかれたばかりの党の十一期六中総では、『建国いらいの党の若干の歴史的問題についての決議』が採択された。この決議は、党の六十年らいの戦いの過程をふりかえり、建国三十二年らいの党の基本的経験を総括し、実事求是の態度で一連の重要な歴史的出来事を評価し、これらの出来事の指導的思想の正しさと誤り、さらにはこれらの事件が生まれた主観的要因と社会的要因を分析し、毛沢東同志の歴史的立場と毛沢東思想を科学的に解明し、われわれの前進する方向をいっそう明確にした。この総会では、その他の重要な決定もおこなわれた。歴史は、この総会がわが党のいま一つのひじょうに重要な会議であり、党と国家が混乱を收拾し、先人の事



業を受けつぎ発展させる新たな里程標であることを証明するにちがいない。

党の歩んできた道をふりかえるとき、中国革命は決して順調ではなかったと、われわれは身にしみて感じている。それはつぎのように言ってもよい。中国共産党がたどってきた六十年は、中国の民族解放と人民の幸福をたたかいたるために、あらゆる犠牲をもとめせず、勇敢に闘ってきた六十年であり、マルクス・レーニン主義の普遍的原理と中国革命の具体的実際とを、実践をくりかえすなかで次第にかたく結びつけてきた六十年であり、党内の正しいものが誤謬を是正し、明るい面が暗い面にうち勝つてきた六十年であった。したがって、それはまた、数えきれぬ困難と曲折を経て、一連の勝利へと向かった六十年であった。

中国共産党の歴史は、民族解放と人民の幸福をたたかいたるために、あらゆる犠牲をもとめせず、勇敢に奮闘した歴史だというのは、どういう意味であろうか。

近代中国の歴史上、アヘン戦争から五・四運動にいたるまで、中国人民は帝国主義、封建主義に抵抗して、長期にわたる勇敢なたたかいをつづけてきた。偉大な革命家孫中山先生の指導した辛亥革命で、清朝の皇帝がくつがえされ、二十余年にわたる封建的専制王朝の支配に終止符が打たれた。だが、これらすべての闘争は、どれも真に中国を救う活路をさがしあてることができなかった。ロシアの十月社会主義革命と中国の五・四運動ののち、国際プロレタリアートの支援の

もとに、マルクス・レーニン主義が草分け期の中国労働運動と結びつくことによって、中国共産党が生まれ、中国革命はようやく、まったく新しい局面を迎えることになった。

中国革命の敵はひじょうに強大で、残酷であった。だが、この世のいかなる苦難も、中国人民と中国共産党をおしつぶすことはできなかった。わが党は、なにもをも恐れぬ革命精神で、人民の闘いを指導した。われわれは人民と運命をともにしてきた。われわれは人民にしっかりと依拠し、人民は心の底からわれわれを信頼した。わが党は、みずからを中国革命の歴史上もっとも先進的で、もっとも強大な指導勢力に鍛えあげ、しかも、きわめてきびしい闘争のなかで、英雄的にたたかおう新しい型の人民の軍隊をさきあげてきた。二十八年の刻苦奮闘のすえ、北伐戦争、土地革命戦争、抗日戦争、解放戦争という四つの偉大な人民革命戦争を経て、わが党は中国各民族人民を指導して、一九四九年、ついに帝国主義、封建主義、官僚資本主義の反動的支配をくつがえし、新民主主義革命の偉大な勝利をかちとり、人民民主主義独裁の中華人民共和国をうちたてた。

建国後、わが党は全国各民族人民を指導して、ひきつづき前進した。われわれは帝国主義、覇権主義の威かくと転覆活動、破壊と武力挑発にうち勝ち、偉大な祖国の独立と安全を守りぬいた。われわれは、台湾省とその他の島嶼を除く国家の統一を実現し、うち固め、全国各民族人民の大

団結を実現し、うち固め、全国の労働者、農民、知識分子の大団結を実現し、うち固め、中国共産党の指導する、各民主党派と全面的に協力しあう、社会主義の勤労者、社会主義を擁護する愛国者、祖国の統一を擁護する愛国者からなるもつとも広範な統一戦線を実現し、うち固めるとともに、わが国社会の新民主主義から社会主義への偉大な転換をみごとになしとげた。全党と全国各民族人民の奮闘努力によって、われわれは生産手段私有制にたいする社会主義的改造を基本的になしとげ、計画的な、大規模の社会主義経済建設をくりひろげ、わが国の経済・文化事業にかつてない大発展をもたらした。われわれの仕事にどれだけ欠点と誤りがあるかと、また、われわれの一部制度がどれほど不完全なものであろうと、われわれはすでに搾取制度と搾取階級を消滅して、社会主義制度を確立し、これによって、世界人口の四分の一近くを占める中国は人類の歴史にまったく新しい社会主義社会に入ったのである。これが中国の歴史もつとも深い意義をもつ社会的変革であることは、いささかも疑いをいれない。これは人類の進歩をめざす事業の、はかり知れない意義をもつ飛躍である。これはマルクス主義の大きな勝利であり、発展である。

そのコントラストはいかにも鮮明である。中国共産党が生まれるまで、アヘン戦争からかぞえて八十年の間、人民はこのうえなく勇敢に、たえまなく闘ってきたにもかかわらず、それは一回また一回と失敗に終わった。いかに多くのすぐれた人たちが恨みを飲んで倒れていったことか。

だが、中国共産党が創立されてから今日にいたる六十年の間に、事態はすっかり変わった。中国の歴史は新紀元をひらき、中国人民は自らの運命をその手に握った。世界の東方で、中国人民はたくましく立ちあがった。中華民族が侮辱、抑圧された時代は、もはや永遠に過去のものとなったのである。

中国共産党創立六十周年を祝うにあたり、われわれは中国における人民革命の偉大な成果が容易に獲得されたものではないことを身にしみて痛感する。それは、中国人民が中国共産党の指導のもとで、まる六十年の困難と苦しみにみちた戦いを経てかちとったものであり、刑場、戦場、その他さまざまな戦闘の場で命をささげた何千何万という共産党員と党外の革命家が血の代償を支払ってかちとったものである。

みなさん、ここで起立して、六十年このかた革命の各歴史的時期に中国人民の利益のために身をささげたすべての革命指導者、革命幹部、共産党員と共産主義青年団員、古い世代の革命家と年若い戦士たち、党外の戦友と外国の友人たち、そして革命のために命をなげうったすべての人びとに、心から哀悼の意を表したいと思う。

中国共産党の歴史は、実践をくりかえすことによってマルクス・レーニン主義の普遍的原理を中国革命の具体的実践にますますかたく結びつけていった歴史であるというのは、どういう意味

であろうか。

わが党は最初からマルクス・レーニン主義を指導思想としてきた。しかしながら、マルクス主義の一般の原理は、いかなる国の革命にたいしてもでき合いの公式を提供するというわけにはいかない。中国のようなアジアの半植民地・半封建の大国の革命の場合には、とくにそうである。わが党の幼年期、すなわち今世紀の二〇年代、三〇年代には、マルクス主義のドグマ化、外国の経験の神聖視という小児病の誤りを一再ならず犯した。小児病の誤りのもとでは、中国革命は暗中摸索をくりかえし、はては絶体絶命の境地におかれるほかはなかった。毛沢東同志の偉大な貢献は、こうした誤った偏向と闘うなかで、また党と人民が力を合わせて奮闘するなかで、マルクス・レーニン主義の普遍的原理を中国革命の具体的実際とみごとに結びつけ、一連の新しい経験を総括し、創造して、中国の状況に適した科学的な指導思想である毛沢東思想をつくり出したことにある。この科学的思想に導かれたからこそ、中国革命はめざましく展開し、破竹の勢いで、つぎからつぎへと偉大な勝利をかちとることができたのである。

毛沢東思想は中国革命の歴史的過程で形成され、発展してきたもので、わが党の集団的英知の結晶であり、中国人民の偉大な闘争の勝利の記録である。毛沢東思想のなかの新民主主義革命の理論、社会主義革命と社会主義建設の理論、革命闘争の戦略と戦術の理論、革命軍隊の建設と軍

事戦略の理論、思想政治工作と文化活動の理論、党建設の理論、ならびにわれわれの今後の活動にたいしてより普遍的な指導的意義をもつ科学的な思想方法、活動方法、指導方法の理論は、いずれもその独創的内容をもってマルクス主義全体の宝庫に新たな財産をつけ加えた。毛沢東思想は、実践によって証明された正しい理論的原則および経験の総括として、また、マルクス主義の中国における運用、発展として、過去においても、また現在と将来においても、依然としてわが党の指導思想である。

歴史の流れの先頭に立つ多くの偉大な人物にはそれぞれ欠点と誤りがあるように、毛沢東同志にもそれなりの欠点と誤りがあった。それは主としてその晩年のことである。なが年、全党と全国各民族人民に敬愛されてきたため、自己過信におちいり、実際からの遊離、大衆からの遊離、わけても党の集団指導からの遊離がますますひどくなった毛沢東同志は、とかく他人の正しい意見を受けいれようとせず、ついにはそれをおさえつけるようになった。その結果、数々の誤りを犯さざるを得なくなり、ついには「文化大革命」のような全局的な、長期にわたる重大な誤りを犯し、党と人民に大きな災難をもたらすにいたったのである。もちろん、「文化大革命」以前の一時期と「文化大革命」がおこされるに時期に、党が次第にひどくなっていく毛沢東同志の誤りに歯止めをかけることができず、その一部の誤った主張を受け入れ、それに同調したことも認

めなければならぬ。われわれは、なが年、毛沢東同志とともに活動してきた戦友たちや、なが年、毛沢東同志にしたがって戦ってきた多くの生徒たちにも、この点においては責任があると痛感し、そこからしかるべき教訓を汲みとる決意を固めている。

毛沢東同志はその晩年に重大な誤りを犯したことが、その全生涯についていふなら、中国革命にたいする功績が誤りをはるかにしのぐことはひじょうにはつきりしている。毛沢東同志は青年時代から中国革命に献身し、そのために生涯をかけて奮闘した。かれは党の創立者の一人であり、栄えある人民解放軍の主要な創建者である。かれは中国革命のもっとも困難な時期に、いちばん早く革命の正しい道を見つけ出し、正しい全般的戦略を定めるとともに、一連の正しい理論と戦術を逐次形成し、革命を失敗から勝利へと導いていった。建国後、党中央と毛沢東同志の指導のもとに、新中国はいちはやく基盤を固め、偉大な社会主義の事業に着手した。たとえ毛沢東同志の生涯の最後の数年間、誤りが非常に重大であったときでも、かれはなお祖国の独立と安全に十分気をくばり、世界情勢の新たな展開を的確に把握し、党と人民を指導して覇権主義のありとあらゆる圧力をはねかえし、われわれの対外関係の新しい枠組をつくりあげた。長期にわたる闘争のなかで、われわれの全党の同志たちは、毛沢東同志と毛沢東思想から英知と力を汲みとってきた。毛沢東同志と毛沢東思想は、わが党の各世代の指導者と多数の幹部を育成し、全国各民族

人民を教育した。毛沢東同志は偉大なマルクス主義者であり、偉大なプロレタリア革命家、理論家、戦略家であり、中華民族の歴史におけるもっとも偉大な民族的英雄である。毛沢東同志は、世界の被抑圧民族の解放をめざす事業、人類の進歩をめざす事業のために大きな貢献をした。その偉大な功績は永遠に不滅である。

中国共産党創立六十周年を祝うにあたって、われわれはこのうえないなつかしさを胸に毛沢東同志を思い起こしている。われわれはまた、毛沢東同志とともに中国革命の勝利のため、毛沢東思想の形成と発展のために重要な貢献をした党のその他のすぐれた指導者、たとえば偉大なマルクス主義者周恩来、劉少奇、朱徳、ならびに任弼時、董必武、彭徳懐、賀竜、陳毅、羅榮桓、林伯渠、李富春、王稼祥、張聞天、陶鑄らの同志を思い起こしている。われわれはまた、わが党の創立当初の重要な指導者李大剣、瞿秋白、蔡和森、向警予、鄧中夏、蘇兆徴、澎湃、陳延年、憚代英、趙世炎、張太雷、李立三らの同志を思い起こしている。われわれはまた、はやい時期に党のため、国のために尽くした人民軍隊のすぐれた将領方志敏、劉志丹、黄公略、許継慎、章拔群、趙博生、董振堂、段徳昌、楊靖宇、左権、葉挺らの同志を思い起こしている。われわれはまた、長期にわたってわが党とともに戦い、臨終のまぎわに栄えある中国共産党員となった今世紀の偉大な女性戦士宋慶齡同志、現代中国の知識界のすぐれた先駆者蔡元培先生、わが国のプロレタリア

ア革命文化の偉大な旗手魯迅先生を思い起こしている。われわれはまた、一貫してわが党を支持してきた党外の親密な戦友廖仲愷、何香凝、鄧演達、楊杏仏、沈鈞儒らの諸先生を思い起こしている。われわれはまた科学・文化界のすぐれた戦士鄒韜奮、郭沫若、茅盾、李四光らの諸同志と聞一多先生を思い起こしている。われわれはまた、中国の人民革命の勝利のために重要な貢献をした著名な愛国人士楊虎城、陳嘉庚、張治中、傅作義らの諸先生を思い起こしている。われわれはさらに、中国人民の親密な友人であり、すぐれた国際主義の戦士であるベチュニン、スメドレー、ストロング、コットニスらの諸同志、ならびにスノー、浅沼稻次郎、中島健蔵らの諸先生を思い起こしている。

中国共産党の歴史は、党内の正しいものが誤ったものを是正し、明るい面が暗い面にうち勝った歴史であるというのには、どういう意味であろうか。

わが党のすすめる革命事業は、中国社会を根本的に改造する偉大な事業であり、前人のかつて行なったことのない全く新しい事業である。革命の敵はひじょうに強大であり、革命の置かれていた社会的条件はまたきわめて複雑であった。したがって、革命闘争のなかで、われわれがあれこれの誤り、時には重大な誤りを犯すことは避けられない。問題は、誤りを犯したなら、実践の声によく耳を傾け、いちはやく猛省し、是正につとめ、全局的、長期的な誤りを避け、前と同じ

ような重大な誤りをふたたび犯さないよう努力することである。

わが党は旧社会の環境のなかで生まれ、発展してきたのである。革命の激しい流れのなかで、多数の革命家がわれわれの隊伍に身を投じ、われわれの力を強めた。しかし、野心家や投機分子がきわめて少数ながらもぐり込んでくるのも避けられないことであった。問題は、わが党が社会を改造すると同時に、自己の改造にもよく注意を払い、さまざまな非プロレタリア思想をもって党内に入ってくる者たちをよく教育、改造し、野心家、陰謀家をよく見抜き、かれらの権謀術数を実現させてはならないことである。

党が偉大な力をそなえているのは、党内にあれこれの消極的現象が絶対に起きないと保証できるからではなく、みずから欠点を克服し、誤りを是正し、すべての異端勢力による破壊にうち勝つことができるからである。ふり返ってもみたまえ、わが党はこのように戦ってきたのではないだろうか。党史においては、陳独秀の右翼投降主義の重大な誤りや王明の左翼教条主義の重大な誤りが発生した。また、党史においては、張国燾と高崗、饒漱石の、党を分裂させる陰謀事件が起き、さらには林彪・江青反革命集団まで現われた。しかし、それにもかかわらず、わが党を瓦解させることはできなかった。林彪・江青のようにきわめて危険な野心家、陰謀家が「文化大革命」の条件を利用して、重要な権力をかすめとり、国と人民に災いをもたらし、きわめて重

大な結果をもたらしたが、それでも最後にはあばき出され、党と人民によって歴史のごみだめにはき捨てられてしまった。これは歴史の事実ではないだろうか。わが党はさまざまな破壊によって命をたれたことがなく、さまざまな挫折によって壊滅されたこともないばかりか、つねに誤りを克服し、暗い面にうち勝つ闘争のなかで新たな、いっそう強大なバイタリティーと生命力をちかえることができた。わが党は無敵である。

六十年の歴史が立証しているように、わが党は確かにマルクス・レーニン主義と毛沢東思想で武装されたプロレタリアートの政党である。わが党は確かに誠心誠意人民に奉仕し、広範な人民の利益以外にいかなる特殊な利益をも追求しない党である。また、わが党は確かに長期にわたる試験に耐えぬき、きわめて豊かな経験と教訓を身につけ、人民を指導してあらゆる困難を克服し、たえず革命の勝利をおさめることのできる党である。このような偉大な党が中国人民の革命事業に占める中核的地位と指導的役割は、歴史によって決定づけられたものであり、中国各民族人民の利益と意志によって決定づけられたものであって、それはいかなる力によっても変えることができず、揺がすことのできないものである。

同志のみなさん、友人のみなさん！

一九七六年十月、わが党は広範な人民大衆の支持を受けて、江青反革命集団を一挙に粉碎し、

革命とわれわれの社会主義国家を救って、わが国を新しい歴史的発展の時期に進みいらせた。十一期三中総を経て、われわれは建国いろいろの党の歴史における偉大な転換をなしとげた。

十一期三中総のきわめて大きな意義は、深慮熟考の末、大衆に依拠し、全面的に、断固として混乱を收拾させることに真の意味で取りくみはじめた点にある。わが党は四中総、五中総、六中総を経て、複雑な状況、困難な条件のもとに、精神を集中し、はりつめた活動をつづけ、思想面、政治面、組織面と社会主義建設事業の各分野で、段取りをもって一連の重要な決定をおこない、それを実行し、左よりの誤った方向を根本的に転換させるとともに、新しい歴史的条件にもとづいて、中国の実状に合った社会主義的現代化建設の正しい道を一步一步と確立した。

もっともはつきりした変化は、林彪・江青反革命集団を審査・批判する基礎に立って、全党、全国の活動の重点を転換したことである。中央から地方にいたる各級の指導部門では、主な精力を社会主義的現代化建設事業に次第に集中していった。社会主義の経済・文化建設は、長期にわたった左よりの指導思想の一掃にとりかかり、順序をおって前進し、実際の効果を重視し、着実な発展をとげる、国情に合った軌道を進みはじめている。とりわけ広範な農村では、党の諸政策を実施し、さまざまな生産責任制を実行し、多角経営を発展させるにしたがって、建国以来まれにみる素晴らしい情勢が現われている。

社会政治の面では、わが党は長いあいだ処理を誤った多くの重大問題を果敢かつ適切に解決し、安定・団結に不利な一連の重大要因をとり除き、社会の混乱と不安をもたらず「文化大革命」のあつた局面に終止符を打った。われわれはいま、社会主義の民主と法秩序の強化につとめ、社会主義政治制度の改革と改善につとめている。これによって、わが国では、安定・団結の生氣はつらつとした政治的局面が力強くうち固められ、発展している。

組織の整頓と作風の整頓によって、党生活の正常化、党内民主の発展、党と人民大衆との結びつきの強化の面でも、かなりめざましい成果をおさめた。「文化大革命」でひどく損われた党の威信は、次第に回復しつつある。

思想解放の方針を正しくつらぬくために、わが党は社会主義の道を堅持し、人民民主主義独裁つまりプロレタリアート独裁を堅持し、共産党の指導を堅持し、マルクス・レーニン主義と毛沢東思想を堅持することをあらためて明らかにした。この四つの基本原則は、全党が団結し、全国各民族人民が団結するための共通の政治的基礎であり、また社会主義的現代化建設の事業がかならず勝利するための根本的な保証である。

偉大な転換、正しい方針と政策は、人民の意志と党の意志に合致したものである。十一期三中総いらいの重大な政治方針について、一部の同志は「非常に適切なものだ」と言っている。「非

常に適切なものだ」という言葉は、広範な幹部と大衆の思想感情の主流を代表している。これは十一期三中総にはじまった転換が強大な力をもち、おしとどめることのできぬものであることの根本的な原因でもある。

もちろん、われわれの前にはまだ幾多の困難がある。混乱收拾の課題はまだ達成されておらず、各分野の活動にもまだ幾多の問題がある。われわれの四つの現代化建設は、物質的条件も、知識や経験も非常に欠けている。人民の生活水準はまだ非常に低く、解決をせまられている問題が沢山ある。党の指導と党の作風には、まだ改善を要する点がある。困難を軽視するのは誤っている。われわれの困難をはっきりと認識してこそ、不敗の地に立つことができるのである。われわれはまだかなり長期にわたる困難な道をあゆまなければならない。ちょうど泰山に登るのと同じで、「中天門」には着いたが、その先にはまだ非常に骨の折れる「胸つき八丁」がひかえており、そこを越えてはじめて「南天門」に到着できるのである。「南天門」から先は、最高峰の「玉皇頂」までかなり順調に登ることができ、そこまで行けば社会主義的現代化建設の雄大な任務を実現したも同然である。「南天門」まで登りさえすれば、「会らずや当に絶頂を凌ぎ、一覽して衆山小さからん」という杜甫の有名な詩の境地がわかるようになる。かつては「衆山」のようであった多くの困難も小さく見え、「絶頂」に向かう道の困難もかなり対処しやすくなる。偉

大な征途の途上、われわれがかならず「胸つき八丁」を征服して、「南天門」に登り、「玉皇頂」にたどりつき、新しい高峰をめざしてさらに前進できることは疑いない。

同志のみなさん、友人のみなさん！

六十年らしい歴史の経験を一言でいうなら、かならずマルクス主義の革命路線がなければならず、この路線を確立し、堅持することのできるプロレタリア政党がなければならぬということである。新しい歴史的時期に、われわれは経済建設を中心とする社会主義的現代化建設の雄大な任務に直面して、この任務を達成する鍵がわが党にあることを痛感している。

いま、全国の各民族人民は希望をわが党に託しており、全世界の人民もわが党に注目している。われわれが新しい時期に、中国革命というこの船をあやつり、荒波を乗りこえ、これまでのような大きな曲折を経ず、これまでのような高価な代償も支払わずに、われわれの農業、工業、国防、科学・技術の現代化建設を比較的順調にすすめ、そして人民を満足させ、子々孫々にたたえられるような成果をおさめられるかどうか、これは完全に今後十数年あるいは二十年におけるわが全党の同志の努力いかんにかかっている。われわれはけっして人民の期待にそむいてはならない。

われわれは高い自覚をもって、わが党を政治的にいっそう成熟した、思想的にいちだんと一致した、組織的にさらに強固な、全国各民族人民を結集し指導して社会主義的現代化建設をすすめることのできる強固な中核にきざぎざあげなければならない。

一、われわれ全党員は中国の社会主義的現代化建設の事業に全力を捧げ、誠心誠意人民に奉仕しなければならない。

誠心誠意人民に奉仕するということは、ゆらい、中国の共産主義者の根本的な立場であり、われわれが永遠に堅持しなければならない建前である。わが党が人民に奉仕するうえでもっとも根本的な点は、広範な大衆を党のまわりに結集し、党の正しい方針と政策、党と人民大衆との密接な結びつき、共産党員の模範的な役割、党の宣伝活動と組織活動を通じて、人民大衆が自分たちの根本的利益はどこにあるのかを認識し、かれらが団結してそのために奮闘するよう仕向けることである。

人民は歴史の創造者である。わが党の指導する人民の革命事業と社会主義建設の事業は、すべて人民自身の事業である。人民のなかでは、共産党員はいつも少数である。したがって、われわれの活動はすべて、人民に頼り、人民を信じ、人民の知恵を汲み取り、人民の創意を尊重し、また人民の監督を受けなければならない。さもなければ、われわれはなにごとをも成就することができず、失敗をこうむることになる。革命が勝利したあとでは、人民が国と社会の主人公であ



る。国の諸活動に対する党の指導のもっとも本質的な内容は、主人公としての人民を組織し指導して、社会主義の新しい生活をうち立てさせることである。

人民に奉仕するうえで共産主義者にもっとも大切なのは、共産主義事業のために生涯奮闘し、人民の利益のためには自己犠牲をも惜しまないという精神である。戦争の日々、広範な共産黨員は戦場でまっ先に突撃し、一番あとに退却し、敵の刃のもとにあつても断じて屈服せず、昂然と犠牲になった。また、いかなる場合にも、大衆に先んじて苦しみ、大衆に遅れて楽しんだ。このことが幾千幾万の人民大衆にどれほど大きな教育とげましをあたえたことであろう。今日の平和な建設の時期にあつても、とくに「文化大革命」の十年にわたる破壊をうけた後は、いっそうこうした精神が必要である。われわれのすぐれた党風は林彪・江青反革命集団によってひどくふみにじられしたが、それでもなお優秀な共産黨員が大勢おり、かれらは人民の利益のためにすすんで自分の個人的な利益を犠牲にし、はては自分の命までもささげるといふ革命精神を保持し、発揚している。かれらは人民から高く称賛されているが、まったくそれにふさわしい。平和建設の時期には、革命精神を捨ててしまつてもよく、大衆と苦楽を共にしなくてもよく、また、黨員の個人的利益を大衆の利益の上においてもかまわないというような思想と行動は、まったく誤っており、われわれ共産党の党性を台なしにするものである。

権力の座にある党の党風は、党の存亡にかかわる問題である。一九四二年、毛沢東同志は「わが党の作風が完全に正しくなれば、全国人民はわれわれに学ぶようになる。党外にこうした良くない傾向の者がいても、善良な人であるかぎり、われわれに学び、誤りを改めるようになる。こうすれば全民族に影響をあたえることができる。われわれ共産党の隊列が整然とし、足なみが一致し、兵士がすぐれ、武器がよいものであるかぎり、いかなる強大な敵もわれわれにうち勝つことはできない」と指摘したことがある。われわれは最大の決意をかためて、党と毛沢東同志のきずきあげたすぐれた党風を大いに復活させ、発揚し、全民族をひきいて高度の社会主義的精神文明をきずきあげなければならぬ。

二、われわれは新しい歴史的条件のもとでマルクス・レーニン主義と毛沢東思想を前進させることに長じていなければならない。

われわれはこれまで、マルクス・レーニン主義と毛沢東思想に導かれて、革命と建設の偉大な勝利をおさめてきた。今後の長期にわたる征途においても、われわれは同様にマルクス・レーニン主義と毛沢東思想に導かれて、新たな、いっそう偉大な勝利をおさめなければならない。もしもわれわれ共産主義者にも伝家の宝があるというのなら、マルクス・レーニン主義と毛沢東思想こそわれわれのもっとも重要な伝家の宝である。マルクス・レーニン主義と毛沢東思想を堅持

し、マルクス主義の基本原理を指針とすることを堅持するのは、ゆらい、われわれ中国共産主義者の播るがすことのできない基本的原則である。

マルクス主義はプロレタリア革命についての科学的思想の結晶であり、われわれが客観世界を認識し、改造するうえでもっとも強大な精神的武器である。マルクス主義の基本原理は実践を経てくりかえし検証された真理ではあるが、しかし、人類社会の歴史の大河におけるすべての真理をきわめつくしてはいないし、また、きわめつくすこともできない。マルクス主義の理論は、われわれ革命をめざす者の行動の指針であり、そのまま鵜呑みにしなければならぬ硬直化したドグマなどではない。マルクス主義に忠実なすべての革命者は、マルクス主義を社会生活から切り離して、これを停止させたり、硬直化させたりしないようにする責任があり、新しい革命の経験でそれを豊かにし、旺盛な生命力を保たせなければならぬ。したがって、マルクス・レーニン主義と、毛沢東思想を前進させるのは、マルクス主義にたいするわれわれ中国共産主義者の根本的姿勢であり、われわれ中国共産主義者の逃れることのできない歴史的責務でもある。これは、もちろん、生やさしいことではない。この重責をになうためには、われわれは大きな努力をほらい、畢生の力をかたむけて、マルクス主義の基本原則と中国の社会主義的現代化建設の具体的実際とをよりよく結びつけなければならない。

われわれはひきつづき中国の革命の歴史を学習し、研究しなければならない。それは、今日の中国が昨日の中国から発展したものである。ところが、われわれは昨日の中国についての理解があまりにも多いのではなく、あまりにも少ないのである。われわれはとくに今日の中国を研究しなければならぬ。なぜなら、うるわしい明日をつくり出すには、まずもって今日の中国にたいする比較的正しい認識に立たなければならないからである。ところが、われわれは現実の中国の国情についても、社会主義建設の客観的法則についても、知っていることが非常に多いのではなく、あまりにも少ないのである。

われわれの事業は総合的なもので、統一した奮闘目標を持っているが、わが国は広大な国土をもつ国であり、状況は千差万別である。そのため、われわれは、全局を研究し、全局に精通すること、局部を研究し、局部に精通することとを緊密に結びつけることが要求される。全局を見ず、統一を無視して、局部を指導すれば、全体から逸脱した盲目的なデタラメな活動をする誤りを犯すことになり、局部を否定し、特殊性を無視して全局を指揮すれば、全体から逸脱した主観的独断の誤りを犯すことになる。われわれ中国の共産主義者は、遠い見通しのきく卓見も持ち、実際に即した精神も持つ革命者でなくてはならない。

われわれは自力更生を強調し、自分の力で自分の問題を解決し、自分自身の経験を大切にす

ことを強調する。しかし、われわれは尊大にかまえて、他人の経験を軽視するようなことがあってはならない。成功の経験であると失敗の経験であるとを問わず、われわれは自分自身の分析によつて、他人の経験から有益な、鏡とするに足るものを汲みとらなければならぬ。したがつて、われわれは自分の経験を研究・総括することに努めると同時に、他国や他の地域や他人のものを研究し、これを分析することに努めなければならない。

マルクス主義の普遍的原理と中国の実際とを結びつけるには、実践、認識、ふたたび実践、ふたたび認識という循環・反復した長期の過程を経る必要がある。新たな歴史的時期に、われわれは思想を解放し、実践のなかでの新たな状況、新たな問題にたえず接触し、それを発見して、頭のなかに豊富多様な具体的感性知識を持たなければならず、同時に頭を働かせて、社会科学と自然科学の知識と方法を把握することに努め、感性知識を理性知識にまで高め、それをかなり系統的な、筋道の通った理論的認識とし、またたえずそれを実践のなかに持ちこんで検証するようにしなければならぬ。このためには、われわれは骨身を惜しまず、読書にはげみ、専門家に教を請い、異なつた意見をよく聞くとともに、実際のなかに深く入り、系統的かつ綿密な調査研究をすすめる、直接的な経験と間接的な経験をうまく結びつけなければならない。

こうした立場、観点、方法で学習と活動をすすめさえすれば、わが党のすべての活動を科学的な軌道にのせることができ、社会主義的現代化建設のなかで、それなりの発見、それなりの創造をすることができ、われわれの偉大な事業を勝利のうちに前進させることができる。

三、党の民主生活をさらに健全にし、党の組織規律をさらに厳格にしなければならぬ。

「文化大革命」の重大な誤りが長期にわたつて是正されなかつた根本的な原因の一つは、わが党の正常な政治活動が破壊され、党の民主集中制、わけても中央の集団指導が破壊されたことにある。その結果、個人崇拜がはびこり、無政府主義と極端な個人主義もはびこつたため、林彪・江青反革命集団とその他さまざまな悪人に乗ずる機会をあたえることになつた。われわれ全党の同志はかならずこの痛切な歴史的教訓を永遠に肝に銘じ、戒めとしなければならない。

われわれは史的唯物論者である。われわれは、歴史における傑出した指導者の重要な役割を否定しないし、プロレタリア政党内にたいする党の傑出した指導者の重要な役割も否定しない。しかし、われわれは同時に、わが党ではかならず大衆闘争のなかでうまれた知徳兼備のすぐれた指導者が集団指導をおこなわなければならず、いかなる形の個人崇拜をも禁じなければならない、と考えている。それぞれの分野で特殊な貢献をし、すぐれた成績をあげた同志については、党組織は職務の高低をとわず、これを表彰し、広範な党員と大衆がこれを学ぶようはげまされなければならない。ただし、こうした宣伝は実際に即したものでなければならず、なんらの誇張もあつては

ならない。

わが党の各級組織では、指導する者と指導される者とのあいだに正しい関係をうち立てなければならぬ。下級は上級の指導を尊重し、これに服従しなければならず、面従腹背や実行拒否の態度をとってはならない。上級は下級の意見に耳をかたむけ、下級の職権を尊重し、下級の監督をうけなければならぬ。指導者は普通の黨員と同じように、組織生活に参加し、党規約と国家の法律を守り、党内党外の大衆と結びつくべきである。指導的なポストにあるからといって、特殊な黨員になつてはならない。

およそ重大な問題は、すべて党委員会の集団的討議を経て決定すべきであり、個人がひとり決めてはならない。党委員会の決定は、全委員が守らなければならぬ。各級の党委員会は集団的指導と責任分担制を実行すべきである。各委員は自分の負担する仕事について真剣に責任を負い、質を重視し、能率をあげなければならない。

黨員は誰でも、中央の指導者にいたる党内のすべての個人を党の会議で批判し、それによる打撃をうけないという権利がある。各級の党組織と全黨員はすべて、活動のなかでの主動性を發揮し、敢然として考え、敢然として行動する独立した責任感を十分に發揮しなければならない。だが、いかなる黨員も、党委員会から責任を負わされた部門を独立王国と見なし、党の利益を損ね

たり、党の統一した奮闘目標を損ねたりするようなことがあつてはならない。

活気にあふれているが、また規律もきびしいということ——これは、ゆらい、わが党の強大な戦闘力の源泉であつた。こんにち、われわれは社会主義的現代化建設をすすめているが、その任務は重く、困難も多い。われわれは、党のこのすぐれた伝統を發揚することがとくに必要である。

四、自分の身体に付着したホコリをつねに払い落とし、権力の座にある条件のもとでも、永遠に革命の青春を保つようにしなければならない。

わが党は三千九百万の黨員をもつ大きな党で、権力の座にあるため、ややもすればいらぶの同志がおごり高ぶり、官僚主義の悪習に染まりやすい。われわれの前には新しい状況、新しい問題が多く、活動のなかで欠点や誤りが生じるのは避けられない。われわれの社会では、階級闘争が一定の範囲で依然として存在し、さまざまな搾取階級の思想とその他の非プロレタリア思想の影響も依然として存在するうえ、國際關係のなかでの複雑な状況もくわわって、資本主義、封建主義と小生産者の氣風の塵埃が日ごと、われわれにふりかかってくる。党内のプロレタリア思想と非プロレタリア思想との矛盾、正しい思想と誤った思想との矛盾は、われわれが批判と自己批判という、共産主義者の自己改造にとって最上の武器をよりよく運用することを求めている。

共産主義者は、原則問題については真理を堅持し、旗じるしを鮮明にしなければならない。党

と人民の利益にかかわる是非の問題では、ひとりびとりの党員は党性を堅持し、自己の態度をはっきりと表明し、自分がなにに賛成し、なにに反対するかを表明しなければならない。原則をかえりみずに、「まあまあ主義で、なごやかな雰囲気を保つ」という墮落し、俗物化した作風は、わが党のプロレタリアの性格とは相容れないものである。

わが党の批判と自己批判のすぐれた伝統は、これまでのある期間、ひどく破壊されたが、いまでは回復されて、発揚されつつあるうえ、いくらかの新たなよい経験も積みあげられるようになった。批判あるいは自己批判は、すべて実際から出発し、誤りがあればそれに応じた是正措置をとるべきで、矛盾をおいかくしても、誇大化してもいけない。批判は十分に理をつくし、教育的意義をもち、同志の自覚を高めるのに役立つものでなければならず、主観的独断で人をおどしつけるようなものであってはならない。誤りを犯した同志がすんで点検し、是正するよう促さなければならず、こじつけたり、「上部や下部に波及させ」たりしてはならない。誤りを犯した同志が誤りを認識し、改めようとしているかぎり、大胆に仕事をしよう励まさなければならぬ。これまで、われわれの主要な誤りが行きすぎた闘争にあったため、その反動で、人びとは自己批判を嫌い、批判もしないようになった。われわれはこうした不健全な気風をたださなければならぬ。

共産党員が批判と自己批判を必要とするのは、わが党をさらに団結させ、戦闘力をもたせるためであって、その逆ではない。われわれが批判と自己批判のすぐれた伝統を完全に復活させ、大いに発揚していくなら、わが党の体質はかならずや青春の活力にあふれ、衰退することはないであらう。

五、政治的自覚も高く、専門業務にも精通した、働きのよりの多くの幹部を各級の指導的なポストにつけなければならない。

わが党の幹部の隊列は、闘争の経歴からみて三、四世代の人をふくんでいると言えよう。このことは、われわれの事業の歴史の長さを示している。こんにち、われわれの各戦線の指導的骨幹のうち、大部分が長期にわたる革命闘争の訓練を経てきたふるい幹部だということは、喜ばしいことである。もしも幹部は党の貴重な宝だというなら、こうした多くの古参の同志こそ、党にとってさらに貴重な宝である。

しかしながら、自然法則の作用によって、大多数の古参の同志は結局、身体が弱くなり、精力が衰えてきている。われわれの事業の後継者をそだて、わが党の方針・政策の連続性を確保するために、いまからきわめて大きな努力をはらって、政治的自覚も高く、専門業務にも精通したいく千いく万の働きのよりの幹部を抜てきし、これらの同志をさまざまな指導活動に加わらせ

て、實際的効果のある鍛錬をより多く受けさせるようにしなければならぬ。革命化、知識化、専門化した、若がえった幹部の隊列をりっぱにきずきあげること、これこそ全党の前に置かれたさし迫った戦略的課題である。

こうした戦略的課題を前に、古参の同志はとくに重要な使命をおびている。葉劍英、鄧小平、陳雲、李先念らの諸同志は、古参の同志が別の誤りをいくらか犯してもまだ許せるが、もしも若い後継者の養成に力をいれなければ、許すことのできぬ歴史的な誤りになる、と何度も語っている。古参の同志はみずから乗り出して、党の組織部門や大衆といっしょに若い幹部を抜てき、育成し、喜びと情熱にあふれて、かれらをさまざまな指導ポストの第一線へと引きあげるとともに、自分じしんは世事からかなり離れた地位に移って、繁雑な日常の仕事の圧力からぬけ出し、重要な将来の問題について意見を發表し、提案を出すようにしなければならぬ。全党の古参の同志が遠い将来のことを考え、後継者養成というきわめて重要な歴史的責任をよりよく担っていくよう、中央は心から希望している。同時にまた、各級党組織と抜てきされた働さざかりのすべての同志が古参の同志を尊重し、配慮をはらい、ふるい同志に学ぶよう希望している。

現在、われわれは、あらためて学習するという大きな課題に直面している。中央は、全党の同志、とくに比較的若い同志が發憤、努力して、党性の鍛錬を強め、政治的水準を高め、自らを鍛

しく律して、マルクス・レーニン主義と毛沢東著作の学習にはげみ、党と国家と世界の歴史を学習するとともに、それぞれの持ち場に応じて、自らの業務に必要な理論、実務、管理、技術の知識を学習するよう希望する。われわれの学習のよしあしは、われわれの指導と活動の水準にかかり、社会主義的現代化建設の進程に直接ひびいてくる。古い世界を破壊することをよく学びとった以上、われわれはかならず新しい世界を建設することをさらによく学びとることができらるであろう。

六、われわれは、永遠に國際主義を堅持し、全世界のプロレタリアトおよび人民大衆と苦樂を共にし、運命を共にしなければならぬ。

中国の共産主義者は、ゆらい、愛國主義と國際主義とを一体のものとしてきた。

われわれは愛國主義者である。われわれは一貫して中国の民族解放と人民の幸福のため、祖国の統一と富強のために全力をつくしてたかかってきた。過去と現在をとわず、われわれはいかなる外国の圧力のまえにも屈服したことは一度もなかった。また、どのような困難に直面しても、われわれは独立自主、自力更生の決意を動揺させたことは一度もなかった。わが国はいま經濟、文化の面でかなり立ち上がっているとはいえ、われわれは覇権主義の武力による威かくの前に、また、すべての強国や富める国との往來のなかでも、一貫してわが民族の自尊心をもちつつ

けるべきであり、絶対に卑屈な思想や行為があつてはならない。われわれは台湾同胞をふくめた全国人民とともに、台湾の真の祖国復帰と祖国統一の神聖な事業の徹底的実現のために奮闘する決意である。

われわれはまたプロレタリア国際主義者でもある。われわれはこれまで、自分の運命を全世界人民の正義の闘争、人類の進歩的事業と緊密に結びつけてきた。われわれの闘争は一貫して世界人民の支持をうけてきたが、われわれもまた世界の被抑圧民族と被抑圧人民の解放闘争、世界平和の事業と人類進歩の事業を一貫して支持し、帝国主義、覇権主義、植民地主義、人種主義に一貫して断固反対してきた。われわれの社会主義的現代化建設の事業は、愛国主義の事業であり、また国際主義の事業でもある。社会主義的現代化建設の事業の成功は、世界平和と人類進歩の事業にたいする大きな貢献となる。ここで、われわれはいま一度ねんごろに声明する——中国共産党は世界の人類の進歩的事業と民族解放事業のためにたたかっているすべての政党および組織といつまでも平等につきあい、友好的に協力し、かれらの有益な経験を学ぶであろう。われわれは、いかなる外国の党の内部問題にも決して干渉しない。社会主義の中国は、将来、富み栄えたあかつきにも、永遠に第三世界に属し、全世界の人民と同じ側に立ち、世界平和と各国人民との友好往来に力を入れ、平和共存の五原則を守り、世界各国との経済・文化・科学技術の

交流と協力をひきつづき拡大するであろう。われわれは、他人を損なつて私利をはかり、力をたのんで弱きをあなどるようなことは、永遠にしないし、また、覇をとなえるようなことも永遠にしないであろう。

同志のみなさん、友人のみなさん！

党の十一期六中総の諸決定は、長期にわたる広範囲な下準備と総会での真剣な討議を経て、生み出されたものである。この総会の成果は、わが党がマルクス主義の原則を堅持する基礎のうえに立って、党の団結をまもり、強めることに習熟していること、わが党の政治生活がさらに健全化されたことを十分に立証している。

国内国外のいちぶの善意ある友人は、かつてわが党がりっぱに団結できるかどうかについて懸念をもち、またごく少数の下心をもつ者は、わが党の団結を挑発し破壊することに希望をかけていた。現在、事實はすではつきりと回答をあたえている——マルクス主義の原則にもとづく中国共産党の確固とした団結は、いかなる力をもつても破壊することはできない、と。

同志のみなさん、友人のみなさん！

われわれプロレタリアートは、未来をその手に握る階級である。われわれの党は、遠大な理想と抱負をもつた党である。わが党の誕生というこの重要な祝日を祝うもつともよい方法は、歴史

的經驗をくみとることを基礎として、まだ解決していない任務に注意力を集中し、一致団結して前向きの姿勢をとることである。

社会主義的現代化建設は、偉大な革命である。われわれは、かつて帝国主義の抑圧と略奪をうけた、経済と文化のたちおくれた東方の大国でこの偉大な革命をすすめている。中国が発達した資本主義国に先んじて社会主義社会に入ったこと——これは中国のおかれた特殊な歴史的条件、わが党の正しい指導、全国人民の刻苦奮闘による結果であり、科学的社会主义の発展であり、わが党と中国人民の光栄である。だが、それと同時に、われわれの社会主義事業が、経済と文化の立ちおくれによる一連の困難にぶつかるとは避けられず、さらに骨の折れる、さらに長期の奮闘を経なければならぬ。われわれはまた、国外からの侵略と破壊の威嚇のもとにおかれてゐる。これらすべては、われわれ全党、全軍、全国各民族人民がひきつづき革命的精神を発揚し、革命的警戒心を高め、革命的意志を練磨して、この偉大な革命の勝利をかちとるよう求めてゐる。

われわれは社会主義への道で重大な挫折をこうむり、大きな苦しみをなめてきた。しかし、誤りと挫折もまた、われわれをより冷静な、より確固とした、より成熟した、より実事求是の、より強力なものにきたえあげた。われわれはすでに挫折と誤りのなかから多くのことを学んだが、ひきつづきより多くのことを学びとらなければならない。この意味からいえば、重大な誤りと挫折も究極的には一時的なものにすぎない。われわれは百戦錬磨の幹部の隊列を擁し、すでにかなりの物質的基盤を築いており、党も、軍も、人民も心から祖国の隆盛を強く願っている。われわれには社会主義制度の優位性があり、そのうえさらに正しい思想路線、政治路線、組織路線がある。これらすべては長期にわたって作用する決定的な要素であることを見てとらなければならない。われわれの社会主義事業には偉大な前途があり、中国の幾億にのぼる人民には偉大な前途があること——これはまったく疑いの余地がない。

党の団結と、党と人民との団結は、われわれの事業が勝利をおさめるための基本的な条件である。中国共産党成立六十周年にあたって、われわれは各戦線で英雄的に奮闘している全国の労働者、農民、知識分子、祖国を守る鋼鉄の長城ともいふべき栄えある人民解放軍、骨身を惜しまず仕事にはげむ広範な幹部、わが党の親密な助手である生氣はつらつとした共産主義青年団員、台湾の同胞、香港・澳門（マカオ）の同胞、国外に住む華僑の同胞にたいし、われわれは心からの敬意を表するものである。また、わが党と協力し、人民革命と建設の事業に貴重な支持をあたえてくれた民主諸党派、党外の人士と各方面の友人にたいしても、われわれは心から感謝の意を表するものである。



中国人民と全世界人民との団結もまた、われわれの事業が勝利をおさめるための基本的な条件である。中国共産党創立六十周年にあたって、われわれは平等と相互援助の關係にあるすべての友好諸國、わが党と中国人民に貴重な支援をあたえてくれたすべての外國の友人と同志にたいし、心からの感謝の意を表するものである。

われわれ全党の同志と全國各民族人民は、マルクス・レーニン主義と毛沢東思想の偉大な旗じるしのもとに、心を一つにして、うまずたゆまず、わが國を富み栄えた、高度の民主と高度の文明をもつ現代化した社会主義強國にきずきあげるため、また共産主義の遠大な理想のために奮闘努力しようではないか！

## 中国共産党第十一期中央 委員会第六回総会の公報

(一九八一年六月二十九日採択)

中国共産党第十一期中央委員会第六回総会は、一九八一年六月二十七日から同二十九日にかけて北京で開かれた。これには、中央委員百九十五名、候補百十四名が出席し、その他五十三名が列席した。中央政治局常務委員会委員胡耀邦、葉劍英、鄧小平、趙紫陽、李先念、陳雲、華国鋒の各同志が議長をつとめた。

今総会の議題は（一）『建国いろいろの党の若干の歴史的問題についての決議』の審議、採択。

（二）中央の主要指導者の改選と増員であった。総会に先立って予備会議が開かれ、この二議題について十分な検討と真剣な討議がおこなわれた。今総会は十一期中総に継ぐわが党の歴史における重大な意義をもつ会議であり、経験を総括し、団結して前進する会議となった。今会議は、党の指導思想の混乱を正す歴史的使命をなしとげたことによって歴史に残ることになる。

総会で満場一致採択された『建国いろいろの党の若干の歴史的問題についての決議』では、マルクス主義の弁証法的唯物論と史的唯物論を運用して、建国三十二年いろいろの党の重大な歴史的事件、とくに「文化大革命」が正しく総括され、これら諸事件における党の指導思想の正しさと誤り、誤りの生じた主観的要因と社会的原因が科学的に分析され、实事求是の精神にのっとり中国革命における偉大な指導者、教師毛沢東同志の歴史的地位が評価され、わが党の指導思想としての毛沢東思想の偉大な意味が十分に述べられている。この『決議』では、三中総いろいろ確立されて

きた、わが国の実情に適した、現代化した社会主義の強国をきずく正しい道が確認され、わが国の社会主義事業と党の活動をひきつづき前進させる方向がいつそう明確にされている。この『決議』の採択と発表は全党、全軍、全国各民族人民が思想的認識を一致させ、一丸となって新たな歴史的任務の達成をめざして奮闘するうえでかならず偉大かつ深遠な影響をおよぼすものと総会  
は考える。

総会は、華国鋒同志から出された、党中央主席と中央軍事委員会主席の辞任の求めに満場一致で同意した。総会は無記名投票を通じて中央の主な指導者を改選、増員した。選挙の結果はつき  
のとおりである。

- 一、胡耀邦同志が中央委員会主席に当選した。
- 二、趙紫陽同志が中央委員会副主席に当選した。
- 三、華国鋒同志が中央委員会副主席に当選した。
- 四、鄧小平同志が中央軍事委員会主席に当選した。
- 五、中央政治局常務委員会は中央主席と副主席の胡耀邦、葉劍英、鄧小平、趙紫陽、李先念、陳雲、華国鋒の七人とする。
- 六、習仲勳同志が中央書記局書記に当選した。

今回の中央の主要な指導者の改選と増員は、マルクス主義にもとづく中央の集団指導と一致団結を強化し、三中総いらいの党の正しい路線と方針、政策の十分な実現を保証するうえで重要な役割を果たすものと総会は考える。

今回の総会では、民主主義が完全に貫かれ、全出席者が自由に、かつ十分に見解を表明した。歴史的経験の総括と中央指導者の人選にあたっては实事求是の科学的態度がとられ、批判と自己批判の精神が守られ、延安の整風期に形成された党のすぐれた伝統が復活し、さらに発揚された。今回の総会にはわが党の強固な団結が生きいきと表わされ、われわれの事業の繁栄、発展ぶりがあますところなく反映された。

わが党が民主主義革命期に歴史的経験を正しく総括して革命の偉大な勝利をからとったと同じように、今総会における建国いらいの党の歴史的経験を正しい総括も今後の社会主義建設事業の新たな偉大な勝利を促すものと、総会は確信する。総会は、全党、全軍、全国各民族人民がマルクス・レーニン主義、毛沢東思想の旗を高くかかげ、党中央の周りにいつそう固く結集し、ひきつづき「愚公、山を移す」精神を發揮し、決意を固め、万難を排して、わが国を現代化した、高度の民主主義と高度の文明をもつ社会主義の強国にまぎあげるために奮闘努力するよう呼びかける。

中国共産党の歴史についての決議

---

1981年 初版発行

出版者 外文出版社  
(北京阜成門外百万荘)

発行者 中国国際書店  
(北京 P. O. Box 399)

---

取扱店 東方書店(東京) 亞東書店(東京)  
中国書店(福岡)(株) 内山書店(東京)  
(株) 朋友書店(京都)  
(株) 藤原書店(東京) 中華書店(東京)

---

編号: (日) 3050-2853

3-J-1582P

00070

